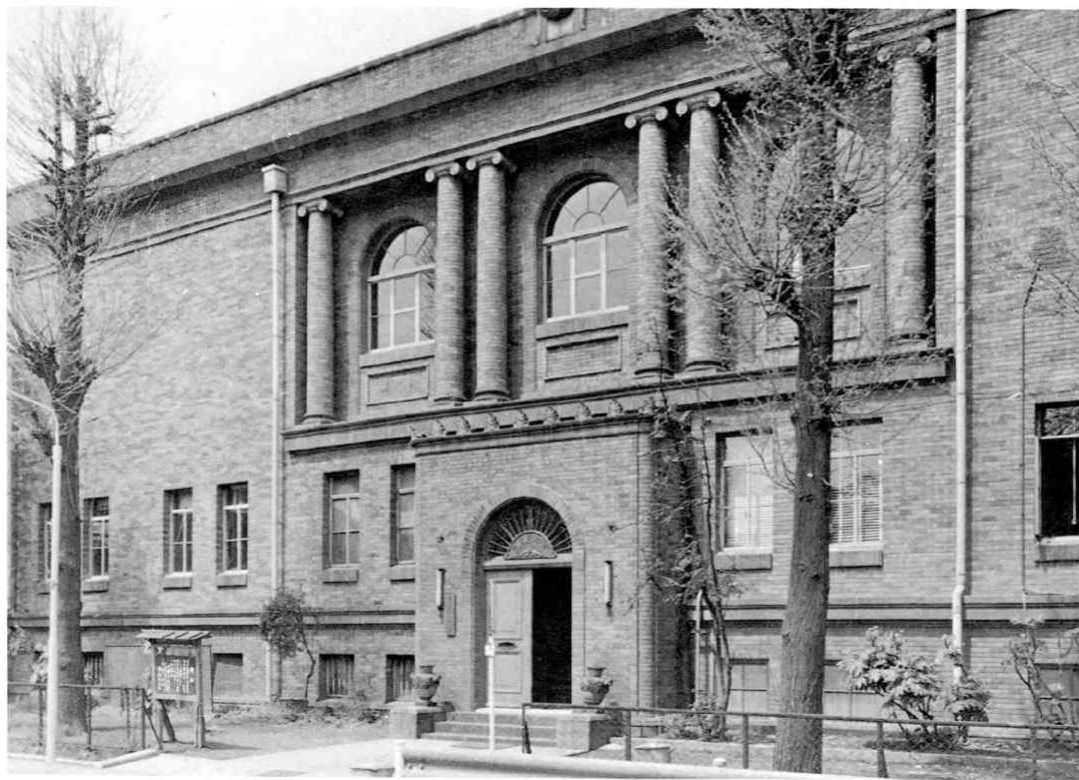


東京国立文化財研究所要覧

1971

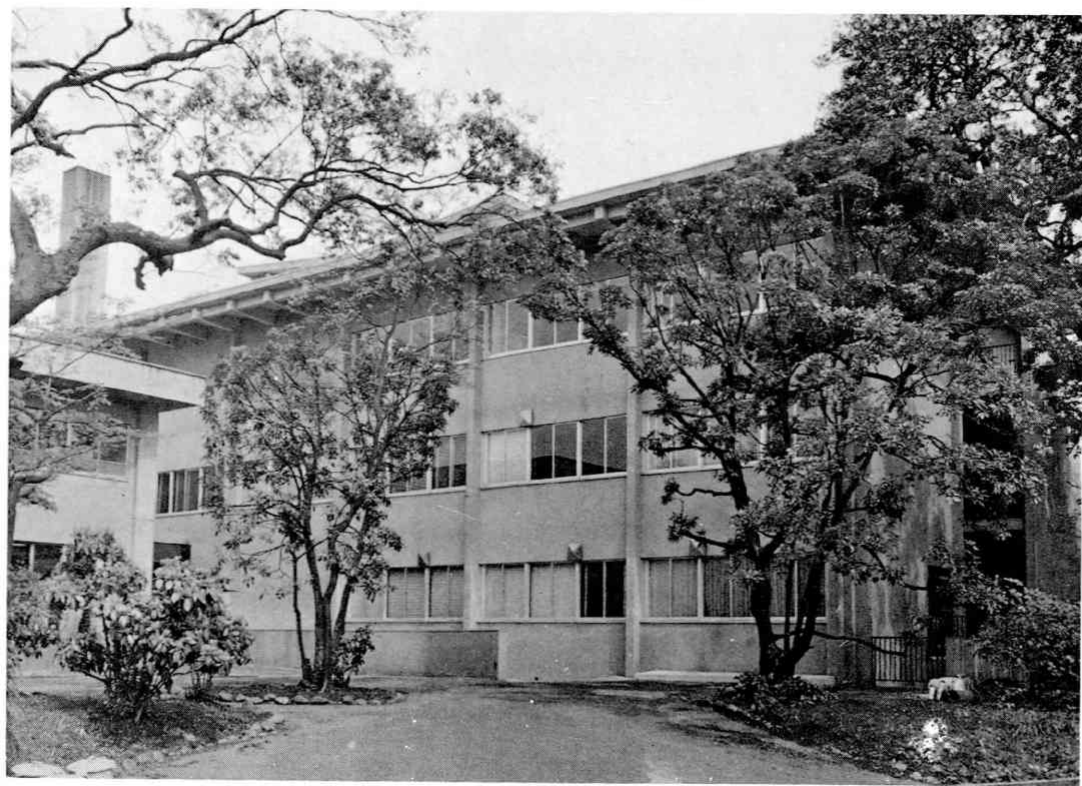
昭和46年度



美術部庁舎



庶務課・保存科学部庁舎



芸能部・保存科学部庁舎

東京国立文化財研究所建物所在図



1. 美術部庁舎
2. 庶務課・保存科学部庁舎
3. 芸能部・保存科学部庁舎

目 次

I	沿 革	1
1	設 立 の 経 緯	1
2	年 表	1
3	歴 代 所 長	5
II	設立目的と機構	6
1	機 構	6
2	職種別予算定員	7
III	土地・建物	8
1	敷地・建物の面積・構造一覧	8
2	建物の平面図	9
IV	予 算	13
1	歳 出 予 算	13
2	科学研究費補助金交付決定額	13
V	研究活動及び事業	14
1	研 究 活 動	14
(1)	美 術 部	14
A	研究・調査活動の概要	15
B	研究 題 目	16
C	研究・調査活動	22
D	主要研究業績	28
E	科学研究費題目	32

(2) 芸 能 部	32
A 研究・調査活動の概要	32
B 研究 題 目	34
C 研究・調査活動	37
D 主要研究業績	40
E 科学研究費題目	42
(3) 保存科学部	42
A 研究・調査活動の概要	44
B 研究 題 目	45
C 研究・調査活動	50
D 主要研究業績	56
E 科学研究費題目	59
F 受託研究	59
2 事 業	60
(1) 出 版	60
A 美術研究	60
B 日本美術年鑑	61
C 東大寺二月堂観音悔過	61
D 芸能の科学	62
E 保 存 科 学	62
F その他の出版物	63
(2) 公開学術講座	65
(3) 開所記念日行事	67
(4) 国際国内関係	68

V 研究施設・設備 71

1 蔵 書	71
2 資 料	71
3 機 器 ・ 設 備	73

目 次

I 沿 革	1
1 設 立 の 経 緯	1
2 年 表	1
3 歴 代 所 長	5
II 設立目的と機構	6
1 機 構	6
2 職種別予算定員	7
III 土地・建物	8
1 敷地・建物の面積・構造一覧	8
2 建物の平面図	9
IV 予 算	13
1 歳 出 予 算	13
2 科学研究費補助金交付決定額	13
V 研究活動及び事業	14
1 研 究 活 動	14
(1) 美 術 部	14
A 研究・調査活動の概要	15
B 研究題目	16
C 研究・調査活動	22
D 主要研究業績	28
E 科学研究費題目	32

(2) 芸 能 部	32
A 研究・調査活動の概要	32
B 研究 題 目	34
C 研究・調査活動	37
D 主要研究業績	40
E 科学研究費題目	42
(3) 保存科学部	42
A 研究・調査活動の概要	44
B 研究 題 目	45
C 研究・調査活動	50
D 主要研究業績	56
E 科学研究費題目	59
F 受託研究	59
2 事 業	60
(1) 出 版	60
A 美術研究	60
B 日本美術年鑑	61
C 東大寺二月堂観音悔過	61
D 芸能の科学	62
E 保 存 科 学	62
F その他の出版物	63
(2) 公開学術講座	65
(3) 開所記念日行事	67
(4) 国際国内関係	68

VI 研究施設・設備 71

1 蔵 書	71
2 資 料	71
3 機 器 ・ 設 備	73

4	黒田記念室	76
5	閲覧室	77
VII	職員	78
1	現職員	78
2	旧職員	80
VIII	関係法規	82

I 沿革

1 設立の経緯

本研究所は、昭和27年4月1日発足したのであるが、その前身であり母胎となったものは、昭和5年に創設された帝国美術院附属美術研究所である。

この美術研究所は、大正13年7月、故帝国美術院長子爵黒田清輝の遺言により美術奨励事業のために出捐した資金で遺言執行人が選択決定した事業である。すなわち遺言執行人代表伯爵樺山愛輔は、故子爵の遺志にしたがってこの資金で行なうべき事業の選定を伯爵牧野伸顕に一任した。牧野伯爵は帝国美術院長福原鐘二郎および東京美術学校長正木直彦とはかつて諸方面の意見を徴し、またわが国美術上の必要に照らして次の事業を行なうこととした。

- (1) 美術に関する基礎的調査研究機関として美術研究所を設けること。
- (2) 黒田子爵の作品を陳列して同子爵の功績を記念すること。
- (3) 前二項の目的を達するために適当な建物を造営すること。
- (4) 事業成立のうちは一切これを政府に寄附すること。

2 年 表

昭和元年12月 前記の事業を遂行するため委員会が設置され、東京美術学校長正木直彦が委員長に就任し、美術研究所事業について東京美術学校教授矢代幸雄、黒田子爵作品陳列について東京美術学校教授久米桂一郎・岡田三郎助・同和田英作・同藤島武二および大給近清、建築造営について東京美術学校教授岡田信一郎、会計事務について遺言執行人打田伝吉を各委員として事務を分掌進行させた。

昭和2年2月 美術研究所準備事業を開始した。

同年10月 東京市上野公園内に鉄筋コンクリート造、半地階2階建、延面積1,192㎡の建物1棟を起工した。

同3年9月 前記の建物が竣工したので、美術研究所開設のため必要な備品・図書・

写真等の研究資料を設備し、また館内に黒田子爵記念室を設け、同子爵の作品を陳列した。

同4年5月 遺言執行人代表者樺山愛輔は、建物・設備・研究資料等一切の外に金15万円をそえて帝国美術院長に寄附を願い出た。

同5年6月28日 勅令第125号により帝国美術院に附属美術研究所が置かれ、東京美術学校長正木直彦が同研究所の主事に補せられた。

同年10月17日 美術研究所開所式を挙行了た。

同7年1月 美術研究所の研究成果発表機関誌として、定期刊行物「美術研究」を創刊した。

同年4月18日 株式会社朝日新聞社より明治大正美術史編纂費として本年から向う5ヶ年間毎年5千円、合計2万5千円を帝国美術院に寄附したいとの申出があった。

同年5月26日 帝国美術院はこの申出を受理した。

明治大正美術史編纂委員会規程を設け、美術研究所は明治大正美術史の編纂に関する事務を行なうことになった。

同9年10月18日 毎年10月18日を開所記念日と定めた。

同10年1月28日 鉄筋コンクリート造、2階建、延面積129㎡の書庫が竣工した。

同年4月「日本美術年鑑」の編纂事務を開始した。

同年6月1日 勅令第148号により美術研究所官制が公布された。

研究資料閲覧規程を制定し、閲覧事務を開始した。

同12年6月24日 勅令第281号により美術研究所官制中改正の件が公布され、従来、帝国美術院に附置されていたのを文部大臣の直轄に改められた。

同年11月29日 美術研究所長職務規程、美術研究所事務分掌規程が制定された。

同13年2月12日 木造、平家建、延面積97㎡の写真室1棟が竣工した。

同19年8月10日 黒田清輝の作品、ならびに写真原版を東京都西多摩郡小宮村谷間家倉庫に疎開した。

同20年5月28日 美術研究所の図書・諸資料全部を山形県酒田市本町1丁目本間家倉庫3棟に疎開した。

同年7月～8月 酒田本間家倉庫に疎開した図書資料を爆撃の危険を避けるため、さらに酒田市外牧曽根村松沢世喜雄家倉庫・観音寺村村上家倉庫・大沢村後藤作之

承家倉庫にそれぞれ分散疎開した。

同21年3月29日 酒田市疎開中の図書・諸資料等の東京向け発送を終了した。

同年4月4日 酒田市疎開中の図書・諸資料等が東京に到着し引揚げを完了した。

同年4月16日 東京都西多摩郡小宮村谷間家倉庫に疎開中であった黒田清輝作品ならびに写真原版の引揚げを完了した。

同22年5月3日 美術研究所官制が廃止され、国立博物館官制が制定された。美術研究所は同館の附属美術研究所となった。

同24年 本年度から科学研究費により光学的方法による美術品の鑑識に関する研究が開始された。

同25年8月29日 文化財保護法の制定に伴い、美術研究所は文化財保護委員会の附属機関となった。

同26年1月31日 美術研究所組織規程（昭和26年文化財保護委員会規則第5号）が定められ第一研究部・第二研究部・資料部、庶務室が置かれた。（昭和25年8月29日から適用）

同27年4月1日 東京文化財研究所組織規程（昭和27年文化財保護委員会規則第4号）が定められ、美術部・芸術部・保存科学部・庶務室の3部1室が置かれ、美術研究所組織規程が廃止された。

同年7月1日 芸能部研究室として東京芸術大学音楽学部邦楽科教室2室を同大学から借用し、研究を開始した。

同28年4月26日 保存科学部研究室は、国立博物館保存修理課保存技術研究室として昭和22年発足以来、東京国立博物館地階の1室に置かれていたが、同館構内の倉庫132㎡を改造のうえ移転した。

同29年7月1日 東京文化財研究所組織規程の一部が改正され（昭和29年文化財保護委員会規則第1号）、東京国立文化財研究所となった。

同32年3月28日 東京国立博物館構内に木造、外部鉄網モルタル塗、平家建、8㎡の保存科学部の薬品庫が竣工した。

同年11月30日 従来の2階建書庫のうえに更に1階を増築3階建とし、増築分延面積71㎡が竣工した。

同34年4月30日 国立文化財研究所研究受託規程（文化財保護委員会告示第14号）が

定められ、この年度から受託研究が開始された。

同36年 9月16日 東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され（昭和36年文化財保護委員会規則第1号）、従来の庶務室は庶務課となった。

同37年 3月31日 東京国立博物館構内に保存科学部庁舎として、鉄筋コンクリート造2階建延面積663㎡の建物1棟が竣工した。

同年 7月1日 東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され（昭和37年文化財保護委員会規則第1号）、新たに保存科学部に修理技術研究室が置かれた。

同年 7月20日 芸能部研究室は、保存科学部庁舎の竣工に伴ない、旧保存科学部庁舎に移転した。

同43年 6月15日 文部省設置法の一部が改正され（昭和43年法律第99号）、本研究所は文化庁附属機関となった。

同44年 8月23日 保存科学部庁舎に隣接して新営される別館庁舎（延1950.41㎡）の起工式が行なわれた。

同45年 3月25日 前記の別館が竣工したので、同年5月26日竣工式が行なわれた。

同45年 4月22日 芸能部は、別館3階に移転した。

同45年 5月8日 保存科学部は、別館の地階～2階に実験用機械類の移転据付を終った。

同45年 6月29日 保存科学部庁舎の1階の模様替工事に着手し、同年10月15日工事が終了した。

同年11月2日 所長および庶務課は、本館から保存科学部庁舎の1階に移転した。

（本館は、美術部庁舎となる。）したがって研究所の所在地表示は「12番53号」を「13番27号」と変更された。

同46年 4月1日 保存科学部庁舎および別館の敷地2,658㎡を東京国立博物館から所属換された。

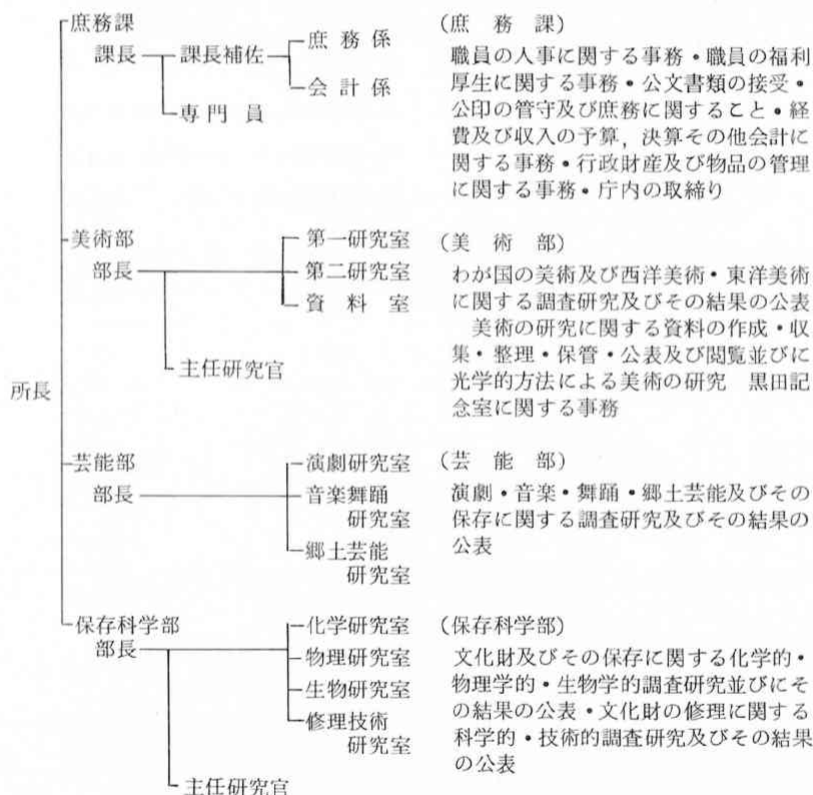
3 歴代所長（昭和5年～昭和46年）

主 事	正 木 直 彦	（昭和 5. 6. 28 - 昭和 6. 11. 25）
主 事	矢 代 幸 雄	（昭和 6. 11. 25 - 昭和10. 6. 1）
所長事務取扱	和 田 英 作	（昭和10. 6. 1 - 昭和11. 6. 22）
所 長	矢 代 幸 雄	（昭和11. 6. 22 - 昭和17. 6. 29）
所長事務取扱	田 中 豊 藏	（昭和17. 6. 29 - 昭和22. 8. 16）
所 長	田 中 豊 藏	（昭和22. 8. 16 - 昭和23. 5. 11）
所長代理	福 山 敏 男	（昭和23. 5. 11 - 昭和24. 8. 31）
所 長	松 本 栄 一	（昭和24. 8. 31 - 昭和27. 4. 1）
所長事務代理	矢 代 幸 雄	（昭和27. 4. 1 - 昭和28. 11. 1）
所 長	田 中 一 松	（昭和28. 11. 1 - 昭和40. 4. 1）
所 長	関 野 克	（昭和40. 4. 1 - 現 在 ）

Ⅱ 設立目的と機構

東京国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行なうことを目的として設立された文化庁の附属機関である。その機構等は次のとおりである。

1 機 構



2 職種別予算定員

区 分	45 年 度	46 年 度
指 定 職	1	1
所 長	1	1
行 政 職 (一)	13	13
課 長	1	1
課 長 補 佐	1	1
係 長	2	2
専 門 職	2	3
一 般 職 員	7	6
行 政 職 (二)	2	1
守 衛	1	—
技能・労務職員	1	1
研 究 職	32	32
部長等研究員	8	8
室長等研究員	6	8
研 究 員	18	16
合 計	48	47

Ⅲ 土地・建物

本研究所の主な建物は、東京都台東区上野公園12番53号所在の本館と、上野公園13番27号所在の保存科学部実験室および別館である。

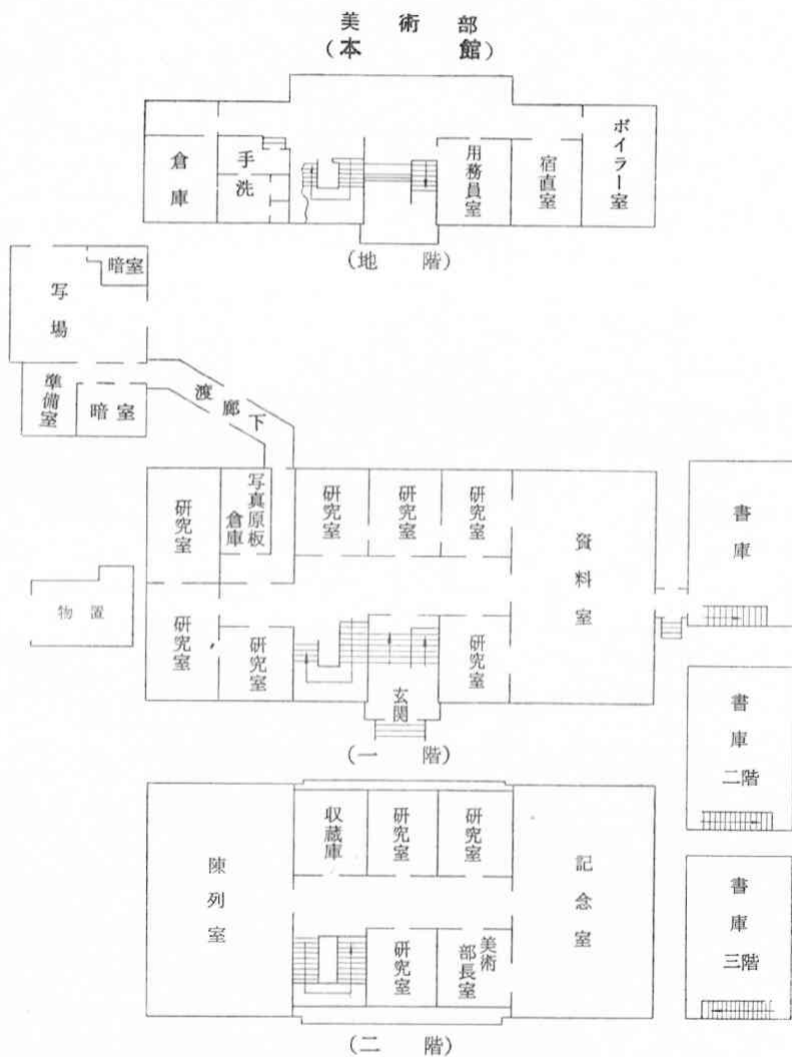
土地は、本館の敷地 1,457 m² 保存科学部実験室および別館の敷地 2,658 m² の計 4,115 m² である。

なお、建物の面積・構造等は、次のとおりである。

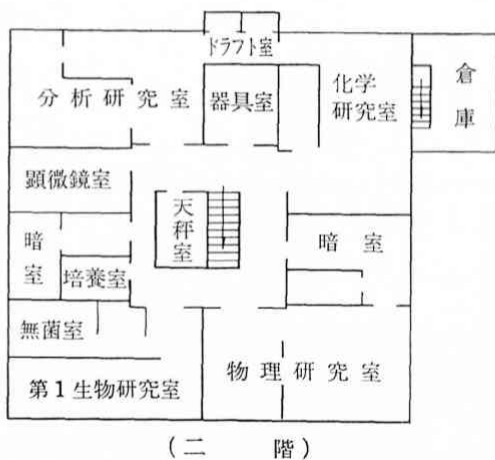
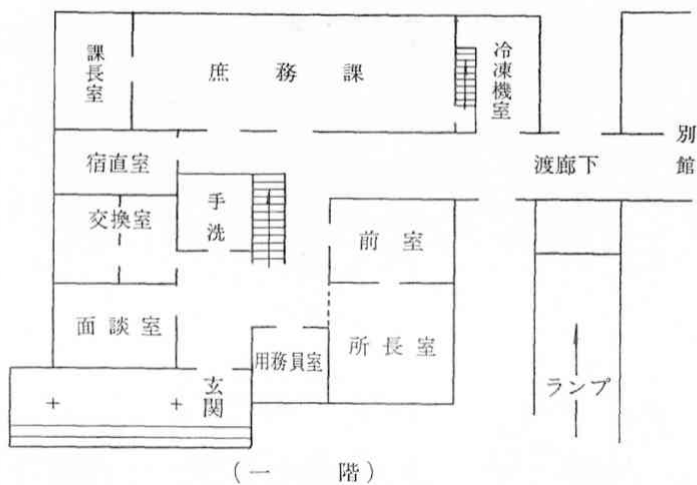
1 建物の面積・構造一覧

No	名 称	種目・ 構造	建面積 延面積	建 築 年 月 日	No	名 称	種目・ 構造	建面積 延面積	建 築 年 月 日
1	本 館	事務所建 RC.地上 2階・地下 1階	$\frac{468.26}{1,192.72}$ m ²	昭 3. 8. 30	6	渡廊下 (写場)	雑屋建 木造平家	$\frac{20.26}{20.26}$ m ²	昭 13. 3. 25
2	書 庫	倉庫建 RC. 3階	$\frac{64.63}{201.80}$	"10. 1. 25 (32. 11. 30) (3階増築)	7	車 庫 (現物置)	"	$\frac{27.96}{27.96}$	" 15. 9. 11
3	渡廊下 (書庫)	雑屋建 RC. 平家	$\frac{4.13}{4.13}$	" 10. 1. 25	8	保存科学 部実験室	事務所建 RC. 2階	$\frac{338.41}{684.91}$	" 37. 3. 28
4	写場及 第1暗室	雑屋建 木造平屋	$\frac{62.80}{62.80}$	" 13. 1. 8	9	別 館	事務所建 RC.地下 1階地上3 階塔屋付	$\frac{462.75}{1,950.41}$	" 45. 3. 25
5	準備室及 第2暗室	"	$\frac{35.12}{35.12}$	"	10	渡廊下 (別館)	雑屋建 鉄骨 平造家	$\frac{27.60}{27.60}$	"

2 建物の平面図 (各庁舎の縮尺不同)



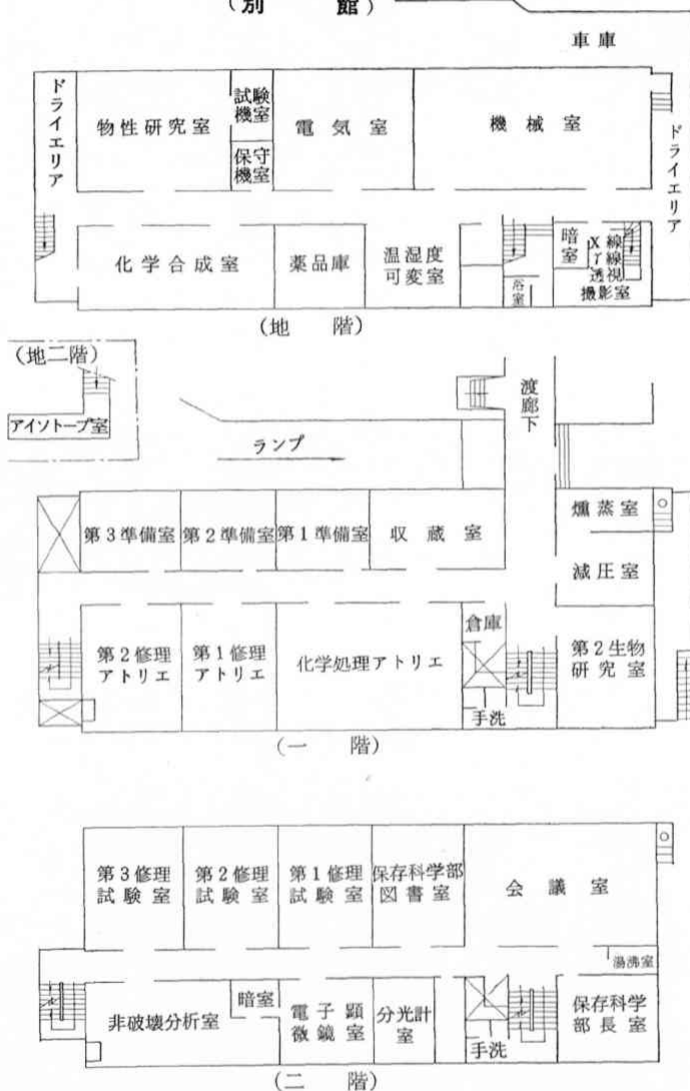
庶務課・保存科学部

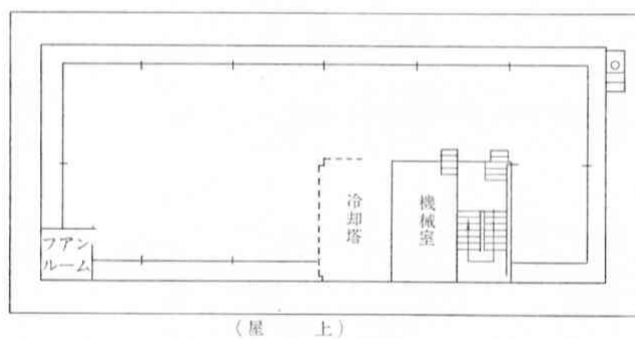
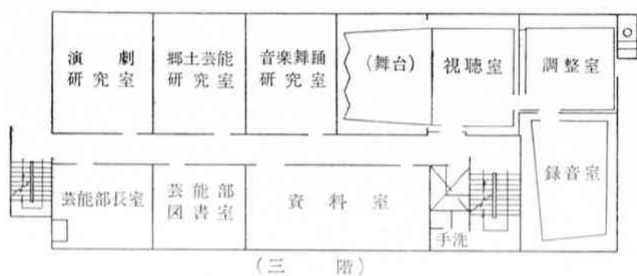


Ⅲ 土地・建物

芸能部・保存科学部

(別館)





Ⅳ 予 算

1. 歳出予算

(単位千円)

区 分	人 件 費	事 業 費	施設整備費	合 計
昭 和 45 年 度	85,061	41,871	27,019	153,951
昭 和 46 年 度	95,534	43,882	1,309	140,725

2. 科学研究費補助金交付決定額

(単位千円)

区 分	一 般 研 究		奨 励 研 究		総 合 研 究		合 計	
	件数	金 額	件数	金 額	件数	金 額	件数	金 額
昭 和 45 年 度	7	3,000	2	210	2	2,500	11	5,710
昭 和 46 年 度	7	16,120	1	140	1	1,400	9	17,660

昭 和 46 年 度 内 訳

研 究 題 目	研究者	金 額	摘 要
日本美術の主要作品に関する基礎的研究	関野 克	8,700 ^{千円}	一般研究 A
初期油彩画に関する科学的方法を含む美術史的研究	登石 健三	4,850	一般研究 B
日本中国書道史における異体字の研究	田村 悦子	800	一般研究 C
出土遺物の変壊生成物に関する考古学的研究	江本 義理	700	〃
語り物芸能の研究	横道萬里雄	700	〃
歌舞伎演技譜の研究	浦山 政雄	200	一般研究 D
公害環境における古美術品の実態調査	門倉 武夫	170	〃
能の脚本史の研究 ——二場形式の成立について——	松本 雍	140	奨励研究 A
日本16・7世紀に於ける絵画と工芸との相関性の検討	中川 千咲	1,400	総合研究 A

V 研究活動及び事業

1 研究活動

(1) 美術部

美術部は日本・東洋の古美術、日本の近代・現代美術とこれらに関連のある西洋美術についての基礎的調査と専門的研究を行ない、その成果を公表するとともに、美術に関する研究資料を作成、収集、整理し、これらの資料を一般研究者の利用にも供し、美術の学術研究のための資料センターの役割も果している。現在3室に分かれ、古美術関係は第一研究室、近代・現代・西洋美術関係は第二研究室、資料関係は資料室が担当する。

調査研究は美術部3室所属研究員の専門領域を中心として実証的に進められているが、学界現下の動向を把握するとともに将来の趨勢を洞察し、方法においても成果においても、基礎的・先駆的役割を果して、広く永く学界に寄与すべく努めている。そのため重要な問題に関しては共同研究を行ない、また当部独自の光学的・化学的研究法を活用し、すでに多くの成果を収めた。

これら業績は当部の機関誌「美術研究」（昭和7年創刊、年6冊発行）に発表し、大部の成果は随時単行の研究報告書として刊行する。また毎年のわが国美術界全般にわたる動向を調査し、客観的資料の提供を主眼として、「日本美術年鑑」を編纂発行している。

研究資料の収集・作成などに関しては、当部の前身たる美術研究所として発足以来、調査研究とともに力をそそいで来たが、現在それらの資料の蓄積も多く、部外研究者広く海外の研究者のため、あるいは文化財関係の事業等のためにも大きな寄与をしている。作成保有する資料公表の一として、定期的には毎年、日本・東洋古美術ならびに近代・現代・西洋美術に関する雑誌論文および単行図書を分類集録した文献目録を編纂し、「日本美術年鑑」に掲載している。古美術関係文献についてはさらに増補訂正を加え一定の年次をまとめて既に数冊刊行したが、今後これが継承に努めた

い。

以上のほか、調査研究成果を簡潔に整理した形で公表するため、毎年1回公開学術講座を開催している。

また当部の黒田記念室は、美術研究所設立のため遺産と遺作を寄付した黒田清輝の作品および関係資料を保管しているが、毎週1回一般に公開している。

A 研究・調査活動の概要

○前年度より継続の文部省科学研究費総合研究「日本16・7世紀における絵画と工芸の相関性の検討」（代表者中川千咲美術部長他、所内7名、所外12名）について本年は、画家と工芸家の生活環境の比較及び交渉の実態の文献的考察、金碧装飾画と蒔絵の手法・デザインにおける関連性、宗達派における絵画と工芸、陶磁における絵付のモチーフとデザインとの関連、風俗画に見る染織、また、絵画工芸にみる南蛮モチーフの比較検討などの分担課題のもとに調査研究を進めた。

その結果、土佐家文書、後藤家文書、晴豊公記等から工芸に関する興味ある事項を多数見出し、大崎八幡神社、薬師堂、瑞巖寺等の調査からは工芸建築装飾に多くの知見を得、また、宗達派の料紙装飾にみる工芸的手法の調査からは蒔絵などの文様との関連について新たな資料を得た。金沢大聖氏所蔵の古九谷、石川県を中心とした陶磁器の調査、東京国立博物館保管の小袖雛形、桃山江戸前期の染織品の調査、宮城県白石市片倉家所蔵の染織品の調査、神戸南蛮美術館その他所蔵の初期洋風画や漆工、陶磁器の調査撮影など、このテーマに関する相当量の資料を集めた。この種未開拓分野の研究に重要な資料を蒐集することが出来、今後の研究に資するところが大きい。

○本年度新たに実施した文部省科学研究費一般研究（A）「日本美術の主要作品に関する基礎的研究（担当者、関野克以下所内18名）」は、日本美術史上の代表的作品について、当研究所美術部の絵画・彫刻・工芸等各分野の専門研究者と、保存科学部の建築史、物理学、科学の専攻者が協力し、一般美術史的鑑識・様式分析に、顕微鏡写真、赤外線写真、X線 γ 線透過撮影、蛍光X線分析等の光学的諸方法を援用して調査研究を行ない、様式・技法・材質等の徹底的解明をはかって精密なる資料を収集することを目的としたものである。

撮影調査活動は、1. 曼殊院黄不動像・神護寺釈迦如来像・高山寺仏眼仏母像その

他の仏画、2. 餓鬼草紙・地獄草紙・法然上人絵伝等の絵巻、3. 万福寺・徳川美術館などの黄檗関係画像及近世障屏画、4. 南蛮文化館・神戸市立南蛮美術館の南蛮関係諸作品、5. 高橋由一・荻原守衛など明治期絵画・彫刻、6. 新薬師寺本尊及び十二神将ならびに平安初期彫刻、7. 東大寺彩絵油色箱・当麻曼荼羅厨子扉絵等の漆芸品、上杉神社・徳川美術館等所蔵染織品などについて行なった。今回は特に光学的研究に必要な機器の整備により、従来不明であった材質・技法あるいは内部構造なども明らかにすることが出来た。研究費の交付が11月であったため、幾多の制約があったがほぼ所期の目的を達し、今後の研究に資するところ大であった。

○特別研究「日本近代美術の発達に関する明治前期中期の基礎資料集成」は、第二研究室全員によって前年度に引続き当時の新聞、その他の刊行物、美術教育、博覧会等の諸資料、関係者の書簡、作品等について調査を進め、基礎的資料の蒐集につとめた。

○各研究員の調査研究、2、3名による共同研究及び他機関、大学における科学研究費総合研究への参加などに関しては各自の研究調査活動の項を参照されたい。

○各個ならびに共同研究の成果は、大体46年度発行の「美術研究」当部の研究会にて発表しているが、「美術研究」は本年度には275号から280号に至る6冊を発行した。なお成果は他の学術誌、学会などにおいても公表している。

○第二研究室を中心とする現代美術の動向調査は経常的事業であるが、45年の結果を「日本美術年鑑—昭和46年版—」として刊行した。

B 研究題目

中 川 千 咲 (美術部長)

〔Ⅰ〕 近世工芸意匠に関する研究

江戸時代初期を中心に陶芸及び漆芸の意匠に関する調査研究。

〔Ⅱ〕 近代陶芸の調査研究

明治大正期における陶芸界の動向を中心としての調査研究。

〔Ⅲ〕 日本16・7世紀における絵画と工芸の相関性の検討

昭和46年度科学研究費総合研究Aの代表者として研究班を組織し、主題に関し調査研究を行なう。

久野 健 (第一研究室長)

〔I〕 平安初期彫刻の研究

日本各地に分布する平安初期彫刻を精査し諸遺品の様式的関係と技法、流派等を明確にする。また天平彫刻と平安初期彫刻との関係を考察する。

〔II〕 中部地方彫刻の研究

中部地方に散在する古彫刻を精査し、その東国的性格を明かにする。また中部地方の遺像と中央彫刻との関係を考察する。

〔III〕 白鳳彫刻の基礎的研究

全国に分布する白鳳彫刻、ことに出土した仏像彫刻をも加えて、その様式的展開と地方性を考察する。

〔IV〕 光学的方法による日本彫刻の調査研究

X線 γ 線等を利用した光学的方法により、わが国の飛鳥時代から鎌倉時代までの古彫刻の内部構造、造像法を検討し、真偽の判定にも役立つような基礎的資料を集めることに努めている。

柳 澤 孝 (第一研究室)

〔I〕 日本仏教絵画史の研究

- (1) 平安・鎌倉時代の主要作品に関し、光学的方法を援用する実証的な調査を実施し、それぞれの作品の占めるべき様式的位置の解明に努めると共に、図像学的な考察にも及ぶ。

- (2) 白描図像の調査研究

〔II〕 平安時代後期世俗画の研究

特に四天王寺所蔵扇面法華經冊子に関する調査研究の続行。

〔III〕 敦煌絵画の研究

年記銘ある敦煌請来絹絵仏画に関する調査研究の続行。

田 村 悦 子 (第一研究室)

〔I〕 和漢書道史の研究

1. 上代・中世の仮名書道が国文学との間にもった交渉・関聯の歴史的研究

2. 室町時代の実用的走り書き様の特異なる一書風の研究。

〔Ⅱ〕 異体字の歴史的研究

唐の書道の影響以前の異体字の調査研究。

猪 川 和 子 (第一研究室)

〔Ⅰ〕 飛鳥・奈良時代彫刻史の研究

古代彫刻史に関する諸先学の研究の諸相を検討し、その問題点を明らかにし、彫刻史の基礎的研究に資する。

〔Ⅱ〕 平安・鎌倉時代彫刻の調査・研究

全国各地に分布する平安・鎌倉時代の彫刻を調査し、資料の蒐集整理を行い、時代、作風、技法、作家の系統等を考察、文献的裏づけを行い、日本彫刻史の研究の基礎とする。

〔Ⅲ〕 尊像別分類による彫刻の研究

〔Ⅱ〕の展開として、尊像別分類により、諸尊の整理を行い、形式上の伝承と発展、種別を究め、歴史的背景を探索し、様式的特色、作風、時代変遷を明確にする。

宮 次 男 (第一研究室)

〔Ⅰ〕 絵巻物の研究

絵巻遺品について網羅的に調査し、その編年の研究を行なうことによって、様式の変遷をあとづけ、時代的・流派の特色を明らかにする。

〔Ⅱ〕 經典説話図の研究

法華経関係説話図を、経巻見返絵と字塔曼陀羅を中心に、その図相の変遷と定着について調査研究する。

〔Ⅲ〕 肖像画の研究

主に似絵・高僧像・頂相を対象とし、その時代的特色と様式の変遷、頂相における日本の特質など、遺品調査にもとづいて検討する。

秋 山 光 和 (第一研究室) 研究員 (併)

- 〔Ⅰ〕 日本古代・中世絵画の研究
- 〔Ⅱ〕 中央アジアおよび敦煌絵画の研究
- 〔Ⅲ〕 光学的方法による東洋絵画の技法材質に関する研究

岡 畏 三 郎 (第二研究室長)

- 〔Ⅰ〕 明治末・大正初期に於ける新絵画運動の研究
草土社、日本美術院の運動を主として。
- 〔Ⅱ〕 日本近代美術の発展に関する明治前期・中期の基礎資料の調査研究
工部美術学校、画塾、初期洋画家等につき基礎資料の蒐集と研究を行う。

関 千 代 (第二研究室)

- 〔Ⅰ〕 日本近代絵画史の研究
 - (1) 狩野芳崖の作品と伝記資料及其周辺の調査研究を続行。
 - (2) 前田青邨作品調査と研究。
- 〔Ⅱ〕 初期油彩画に関する科学的方法を含む美術史的研究
保存科学部との共同により研究をすすめるもので、科学的方法による油彩画の研究を中心に調査実験を行なう。
- 〔Ⅲ〕 日本近代美術の発達に関する明治前期・中期の基礎資料の調査研究
- 〔Ⅳ〕 現代美術の動向についての調査研究

坂 本 満 (第二研究室)

- 〔Ⅰ〕 近代美術における東西交流
16世紀より19世紀に至る汎世界的な美術の交流を、絵画を中心として研究。
- 〔Ⅱ〕 西欧版画史
15世紀以降の西欧美術における版画の展開とその役割、つまりイメージのレパートリーおよびその媒体としての役割の美術史的な位置づけ（これは〔Ⅰ〕とも関連する）を研究。
- 〔Ⅲ〕 日本近代美術の発達に関する明治前期・中期の基礎資料の調査研究

陰 里 鉄 郎 (第二研究室)

〔Ⅰ〕 大正・昭和初期絵画の調査研究

万鉄五郎の作品および関係資料について調査と研究を続行。

野田英夫、松本竣介について調査。

〔Ⅱ〕 初期洋風美術の調査研究

第2次洋風美術、特に幕末期の洋風画家についての調査。

〔Ⅲ〕 日本近代美術の発達に関する明治前期・中期の基礎資料の調査研究

〔Ⅳ〕 現代美術の調査研究

川 上 湮 (資料室長)

〔Ⅰ〕 中国絵画史の研究

中国絵画史研究の基礎作業として、宋元明清画家の作品および伝記資料の蒐集整理を継続。

〔Ⅱ〕 中世東アジア絵画史の研究

宋元代の中国絵画、高麗朝の朝鮮絵画および日本中世絵画の交渉影響関係の精査を企図する。

田 実 栄 子 (資料室)

〔Ⅰ〕 近世初期染織品の研究

上杉神社所蔵の伝上杉謙信・上杉景勝所用服飾類の調査・研究を中心に、伝徳川家康所用服飾類等同時代の服飾類、名物裂系統外来裂の調査・研究を続行。

〔Ⅱ〕 小袖の研究

形態の変遷、模様の様式並びに技術・技法の変遷・進展、用布の地質の調査・研究を続行。

〔Ⅲ〕 伝統的染織の調査・研究

わが国における伝統的染織品並びにその技術・技法の調査を機会ある毎に行って研究を続行。

〔Ⅳ〕 上代裂の研究

V 研究活動及び事業

主として東京国立博物館保管の正倉院裂、法隆寺裂を調査対象に研究を続行。

永 雄 ミ エ (資料室)

〔I〕 日本・東洋美術史の文献学的研究

江 上 纓 (資料室)

〔I〕 平安朝書跡資料に施された絵画装飾の研究

平安時代の書跡資料に施された絵画的装飾を絵画史の見地から研究する。

〔II〕 日本古代文様の様式的、形式的研究

日本古代文様全般を様式、形式の両面から歴史的に研究する。

関 口 正 之 (資料室)

〔I〕 日本仏教絵画史研究

(1) 密教画研究

明王系画像を中心に資料を蒐集整理し様式的検討を試みる。

(2) 仏画に使用された装飾文様の研究

仏教尊像の着衣等に施こされた装飾文様を蒐集整理し仏画の様式との関連を検討する。

〔II〕 南詔国・大理国の仏教美術研究

中国雲南省に興った南詔・大理の仏教美術についてチベットや中央アジアの美術との図像学的、様式的影響関係を検討する。

河 野 元 昭 (資料室、昭和46年10月1日就職)

〔I〕 探幽・常信縮図の研究

既撮影の探幽・常信縮図を中心に、索引によって利用しやすい態勢を整え、江戸狩野成立にどのような役割を果たしたかを考える。

〔II〕 抱一派の研究

抱一派の資料を収集する。それらを基に酒井抱一の画風展開と光琳との美的特質の違いを、当時の江戸画壇との関係に注目しながら考察する。

〔III〕 円山四条派の研究

円山応挙画風成立の過程を、資料収集に努めながら跡づける。

中 村 伝三郎（主任研究官）

〔Ⅰ〕 明治以降の主要彫刻家の伝記資料及び作品の調査研究

- (1) 竹内久一の業績について前年度よりの調査を継続。
- (2) 荻原守衛の「生涯と芸術」のうち〈画家志望の在京時代〉を新出資料に基づき改めて考究。
- (3) 新海竹太郎の業績について改めて調査

〔Ⅱ〕 現代日本美術の調査研究

- (1) 彫刻を中心に工芸・絵画の動向を総合的に常時調査考究している。
- (2) 国際美術展を主とした戦後美術の動向の調査研究
東京国立近代美術館との総合研究（科学研究費）に参加、「日本に招来された国際美術展」を分担。

〔Ⅲ〕 日本近代美術の発達に関する明治前・中期の基礎資料の調査研究

上 野 ア キ（主任研究官）

〔Ⅰ〕 中央アジア古代絵画史の研究

中央アジア古代絵画遺品について、国内資料の収集整理を行なうとともに、在外資料の収集と情報の交換につとめる。

〔Ⅱ〕 敦煌絵画の研究

敦煌壁画と敦煌画の両面における編年的考察を行なう。

〔Ⅲ〕 大谷コレクションの研究

同コレクションの全貌把握のため、資料収集及び様式的検討を続行。

C 研究・調査活動（昭和46年4月～昭和47年3月）

中 川 千 咲（美術部長）

総合研究「日本16、7世紀における絵画と工芸の相関性の検討」で、仙台、京都、金沢等の総合調査に参加し、陶磁・漆芸等の調査を行なった。

なお、8月の九谷窯址第2次発掘に参加した。

久野 健 (第一研究室長)

46年4・5月には、関東地方所在の在銘像の調査を行なう。すなわち横浜市龍華寺の大永4年銘地藏菩薩坐像、称名寺の二王像、行田市八幡神社の僧形八幡神像、持宝院不動三尊像、万福寺愛染明王像、長法寺阿弥陀如来像、6・7月には京都国立博物館寄託の宮町区蔵の薬師如来像及び滋賀県鶏足寺の諸尊像等の調査を実施した。また中部地方古彫刻調査の一つとして9月には糸魚川市の雲台寺、浄福寺、宝伝寺、釈迦堂、天津神社、耕文寺、日光寺等の諸像の調査撮影を行なう。また秋には東京国立博物館で行われた「平安時代の彫刻」展に出陳の古彫刻の詳細な調査撮影を行ない、延暦寺の千手観音像や鞍馬寺の毘沙門天像等はX線撮影を行ない成果を得た。12月には京都国立博物館寄託の園城寺十一面観音像及び清涼寺の阿弥陀三尊像、獅子窟寺の薬師如来像等平安初期の代表的遺品を精査し、47年1月には千葉県岩坂部落有の虚空蔵菩薩像、小松寺の銅造十一面観音像の調査撮影を行なった。さらに2月には新薬師寺の薬師如来像及び十二神将像のX線及び赤外線、普通写真による調査を実施し、その結果は近く美術研究に発表の予定である。

柳澤 孝 (第一研究室)

- 〔I〕 (1)平安・鎌倉時代の仏教絵画の主要作品のうち、京都・奈良国立博物館保管の諸作品一神護寺釈迦如来、曼殊院黄不動、高山寺仏眼仏母、知恩院早来迎など(以上京博)、千手観音(奈良博)、並びに個人所蔵普賢十羅刹女像などについて、光学的方法による調査を行ない、それぞれの様式技法に関する詳細な実証的研究を実施した。(2)ユネスコ東アジア研究センター仏教美術研究部会の専門委員として、鳳凰堂の総合調査における絵画部門を担当し、詳細な調査研究に従った。また同研究センターの依頼により、1960～69年の10年間にわたる仏教美術関係文献目録の編纂事業を分担した。
- 〔II〕 扇面法華経冊子の成立問題に関し、玉葉諸写本の検討や如法経と経塚との問題の解明ないし平家納経見返し絵の様式や料紙装飾法との比較考察を通して詳細な研究を推進し、もっとも可能性ある年代的結論を提説した。
- 〔III〕 年記銘ある敦煌請来絹絵仏画については、前年度に引き続き写真資料の蒐集整理を行ない、かつ図像学的並びに様式的研究を実施した。

田 村 悦 子 (第一研究室)

- 〔Ⅰ〕 書道史と国文学とが交渉関する領域に研究を向けた。日本文学では散文にも和歌を入れることが多い。その散文の中で和歌をどういう形に書くかの書式は多様であるが、諸書式の先後展開の径路をあとづけ、物語文学の発生に関係する考察を試みた。
- 〔Ⅱ〕 国文学作品の書写は優麗な早仮名を以てされたことが多いが、文学の受容鑑賞が盛になると、さして美を意図せぬ走り書き書風で多量に文学作品が書写される。室町時代は暗黒時代でなく寧ろ後者の時期と考える事が出来、これ迄書道美術史から閑却された写本が少くない。その一つとして「こわたの時雨」の吉田忠氏蔵写本を調査し、そういう走り書き書風も意を用いぬ点に自然の美が存することを見出し、又、中世文学研究に重要な資料を提供した。
- 〔Ⅲ〕 日本における異体字は奈良平安時代に隋唐のそれが、鎌倉室町に宋元のそれが影響し、これらについては先に調査研究したが、それ以前六朝の異体字の感化を受けている聖徳太子自筆法華義疏を調査研究した。これについては文部省科学研究費の交付をうけた。

猪 川 和 子 (第一研究室)

昭和46年度は、研究題目〔Ⅰ〕に関しては、法隆寺彫刻に関連して、最近の飛鳥、奈良時代彫刻史研究の動向を考察、従来の調査結果をまじえて法隆寺の彫刻の講演を行った。

〔Ⅱ〕 に関しては、平安時代の主要な彫刻、唐招提寺講堂像に類似する香川正花寺菩薩像、奈良薬師寺十一面観音像、和歌山金剛宝寺観音像五軀、兵庫中山寺十一面観音他、三重普賢寺普賢菩薩、朝田寺地藏、文化庁薬師如来、峯定寺千手観音、鞍馬寺毘沙門三尊ほかの多くの像の調査撮影（X線撮影も含む）を行った。鎌倉時代彫刻としては個人蔵の弥勒菩薩を紹介、南北朝時代彫刻の中、とくに円派を中心とする作家の諸作例を集め、美術研究に発表した。

〔Ⅲ〕 に関しては、平安初期の四天王の作例を網羅し、形制についての研究を論文にまとめた。

宮 次 男 (第一研究室)

- 〔Ⅰ〕南北朝～室町時代の絵巻遺品についての調査を行い、特に長谷寺縁起と西行物語絵巻について、その成立時期と製作年代についての検討を行った。また御物蒙古襲来絵巻、京博所蔵絵巻類の調査などを行った。
- 〔Ⅱ〕厳島神社に所蔵される平家納経以外の法華経10種についてその見返絵を調査・撮影し、立本寺蔵法華経文字塔曼陀羅8幅を調査・撮影した。
- 〔Ⅲ〕黄檗宗関係の絵画のうち、万福寺所蔵の画像を調査・撮影した。また、四国、山陽の地方にある頂相及び羅漢・十王図の調査を行った。

秋 山 光 和 (第一研究室) 研究員 (併)

- 1 平等院鳳凰堂屏絵の調査研究
- 2 扇面法華経の絵画に関する研究と報告作成
- 3 米国所在の絵巻物および中国説話画卷の調査

岡 畏三郎 (第二研究室長)

- 〔Ⅰ〕大正期における絵画運動について、当時刊行の諸資料を調査蒐集し、又当時の作家、美術関係者を訪ね所蔵作品や資料の蒐集につとめた。
- 〔Ⅱ〕明治美術の基礎資料の調査研究については、新聞、雑誌、展覧目録、その他当時の諸記録をもとに、美術関係施設、展覧会、博覧会、美術界の動向につき、資料の蒐集につとめた。

関 千 代 (第二研究室)

保存科学部との共同研究である「油彩画における科学的方法による研究」に比較的多くの時間を割いた。同研究は、従来この種のものがなく、今回を最初とするので、研究に相応しい対象物を選定し、この調査研究を行った。その対象は次の通りで、これにより、貴重な基礎的データの資料を得ることが出来た。a) 黒田清輝作品(本所収蔵品) b) 高橋由一作品(金刀比羅宮蔵品) c) 秋田蘭画、長崎絵画(長崎県立・同市立博物館蔵品) そのほか島津家蔵品の狩野芳崖筆「犬追物図」を鹿児島市尚古集成館において調査撮影を行い、また前田青邨作品集製作に参加、作品撮影にあたり

随時調査を行った。

坂 本 満 (第二研究室)

46年2月末よりフランスの国立図書館に日仏美術考古学会の給費研究員として派遣され、47年3月まで同図書館版画室の世界でも有数の14世紀末から現代に至る西欧版画資料を系統的に調査。この間ミュンヘン中央美術史研究所、クラコフ大学附属図書館、ワルシャワ国立美術館、ロンドン・ブリティッシュ・ミュージウム等の所蔵版画も調査する機会を得た。

陰 里 鉄 郎 (第二研究室)

先年度に引続き万鉄五郎関係資料を調査し、その結果を「美術研究」所載論文にまとめた。また兼ねてから続継中の高橋由一に関する調査は、その結果の一部を神奈川県立近代美術館における展覧会に役立てることができた。10月からオランダのライデン大学日本研究センターおよびフランスのパリ国立図書館に文部省在外研究員として出張。オランダでは多数の川原慶賀の作品を調査し、他に初期洋風画家の作品の源泉に関する調査を続行中。

川 上 涇 (資料室長)

昭和46年10月正木美術館所蔵日本中世絵画、同年10・12月万福寺および同寺塔頭所蔵中国画・日本近世絵画、昭和47年2月神奈川県立博物館「鎌倉の水墨画」展出品日本中世絵画、栃木県吉沢氏所蔵中国画を調査した。

昭和46年11月台北故宮博物院所蔵宋元明清絵画約90点の調査を行った。

田 実 栄 子 (資料室)

研究題目の中、特に力を注いでいる「近世初期染織品の研究」は、三つの科学研究費(当研究所の一般研究A《担当者・関野克》、当研究所の総合研究A《代表者・中川千咲》、東京国立博物館の総合研究A《代表者・北村哲郎》)に加わっていたため、米沢・上杉神社、仙台市博物館、白石・片倉家、水戸・徳川家、名古屋・徳川美術館、山口・野田神社、防府・毛利博物館、東京国立博物館、京都国立博物館等で、

V 研究活動及び事業

実物調査を頻繁に行なった。

また、「小袖の研究」は、この年二十年來の研究をまとめて、一般書ではあるが、文化庁監修・至文堂発行の日本の美術67「小袖」一冊にまとめた。

「伝統的染織の調査・研究」は、この年は久留米絣と博多織の現地調査を主とし、「上代裂の研究」は機会あるごとに行なった。

江 上 綏 (資料室)

平安時代書跡資料に施された絵画的装飾の調査研究としては、奈良興福寺蔵の重要文化財紺紙金字成唯識論について重ねて調査を行なった他、御物の安宅切ならびに絹地切についても京都御所で調査を行なった。また47年3月より米国に調査旅行し、関係遺品を調査した。大陸との関係における日本古代文様の研究についても、資料の収集につとめ、研究を進めた。

関、口 正 之 (資料室)

(1)密教画研究については愛染明王像に関する文献資料の蒐集を行なった。(2)仏画装飾文様研究では昨年度から継続して資料蒐集を行なっているが、本年は(1)密教画研究の意味も込めて京都・奈良国立博物館寄託の仏画(神護寺釈迦如来、高山寺仏眼仏母、曼殊院黄不動、松尾寺普賢延命など)について調査し資料の蒐集を行なった。

河 野 元 昭 (資料室)

46年10月・12月二度に亘り黄檗山万福寺所蔵品の調査撮影を行なう。47年1月新しく見出された日光東照宮陽明門の密陀袖彩色画(狩野英信下画)の調査撮影を行なう。2月浮世絵協会主催在外浮世絵展出品作品、関東の水墨画展(神奈川県立博物館)出品作品の調査撮影を行なう。同月大阪西福寺、篠山専念寺に於て、森狙仙を中心に森派関係資料の収集に努める。

中 村 伝三郎 (主任研究官)

〔I〕 明治以降の彫塑史研究を専攻しているので、この時期関係の作品及び文献資料の調査蒐集に常時つとめているが、特に今年度は、前々から協力してきた「杜

園の芸術」展（5月1日～6月20日 奈良県立文化会館）の開催をみたので、この展観内容を調査見学するとともに、当展を担当した浅井允晶学芸員の好意によって、森川杜園（1820～1894）関係の文献資料、ひいては明治初期・中期の彫刻関係基礎資料を精査することが出来た。このことは前年度より調査を継続している竹内久一の業績に関して、明治10年代の奈良における森川杜園との密接な関係について更に研究を深めるのに好機会となった。

- 〔Ⅱ〕現代日本美術の動向を、彫刻を中心に工芸・絵画など総合的に調査研究をすすめているので、「日本美術年鑑」編集のために必要な資料蒐集も兼ねて、都内をはじめとより近県の公私美術館での諸展、街の多くの画廊で各週毎に開かれている個展やグループ展など重点的に観覧調査し、従ってこれに費す時間は一年中の大半といえる。

上 野 ア キ（主任研究員）

ソ連名品百選展に出品されたエルミタージュ博物館所蔵の誓願図について原所在の比定を行なって発表し、従来未発表のソ連の資料に関する情報収集の枠を拡げる機会を得た。また各国の中央アジア美術史研究者と資料の交換につとめている。

敦煌絵画研究の総合研究も継続し、数度の研究会を重ね、多くの新資料に接し、新知見を得た。

なお平安時代仏画の調査撮影に同行した。

D 主要研究業績 (①:著書 ②:論文 ③:解説
④:研究発表 ⑤:講演・放送 ⑥:その他)
昭46・4～昭47・3

中 川 千 咲（美術部長）

- | | |
|---------------|----------------|
| ①赤絵（日本の美術71） | 至文堂 47・4 |
| ②丸文のある古九谷の二作品 | 美術研究 275 46・11 |

久 野 健（第一研究室長）

- | | |
|-------------|----------------|
| ①東北古代彫刻史の研究 | 中央公論美術出版 46・10 |
| ①願成就院 | 〃 47・3 |

V 研究活動及び事業

- ②新潟県下の古彫刻 越佐研究 46・10
- ②平安初期の地藏菩薩像について ミュージアム 247 46・10
- ②平安初期における如来像の展開 上 美術研究 276 47・3
- ③日本彫刻<世界美術小辞典> 芸術新潮 47・1
～3
- ④平安初期彫刻の展開 東京国立博物館講演会 46・11

柳 澤 孝 (第一研究室)

- ③世界美術小辞典 日本編・絵画 (古代・中世Ⅰ) 芸術新潮 262 46・10
- ④扇面法華経冊子の成立をめぐる 美術部研究会 46・7
21

田 村 悦 子 (第一研究室)

- ②吉田忠氏蔵古写本「こわたの時雨」について 上, 下 美術研究 276 46・12
" 277 47・2
- ③高野切・熊野懷紙・卷子本和漢朗詠集その他 日本名宝事典 46・5
- ③定家と土佐日記 中日新聞 46・7
- ⑤物語・草子類における和歌の書式 美術部公開学術講座 46・10

猪 川 和 子 (第一研究室)

- ②観世音寺の美術 月刊文化財 93 46・6
- ②天文十一年修理銘のある弥勒菩薩像について 史迹と美術 417 46・7
- ②平安時代の四天王彫像の形制について ミュージアム 246 46・9
- ②新知見の南北朝時代在銘像 美術研究 280 47・3
- ③日本名宝事典彫刻 解説 小学館 46・5
- ③世界美術小辞典日本彫刻解説 芸術新潮 47・1
～3
- ⑤法隆寺の彫刻 研究所開所記念講演会 46・11

宮 次 男 第一研究室)

- ①面と肖像 (共著) 小学館 46・6
- ②長谷寺縁起 (上・下・公刊) 美術研究 275・276・278 46・5
47, 11

- ③雪溪筆獅子・虎豹図屏風解説 古美術35 46・12
 ③絵巻入門(2-13) 日本美術工芸 391-402 46・4
 ③文晁筆一遍上人絵伝解説 古美術36 47・3

秋 山 光 和 (第一研究室) 研究員 (併)

- ②源氏物語の絵画論 (源氏物語講座第5巻) 有精堂 46・9
 ⑤The zenith of the Japanese scroll-painting in XIIth century
 米国コロンビア大学 47・3
 The development of the landscape painting in early medieval
 Japan 米国ペンシルヴァニア大学 47・3
 Tun-huang Pien-wen and Japanese narrative paintings
 米国ペンシルヴァニア大学 47・3

岡 畏三郎 (第二研究室長)

- ①創作版画の抬頭 (日本絵画館・大正篇) 講談社 46・6
 ①風景版画 (日本の美術) 至文堂 47・1
 ②山下りんの伝記と作品 美術研究 279 47・1
 ③小出栖重<近代日本美術家の文献紹介> 現代の眼 46・11

陰 里 鉄 郎 (第二研究室)

- ②円鳥会一万鉄五郎の周辺 絵86 46・4
 ②洋画家の南画<岸田劉生と万鉄五郎の場合> 三彩 278 46・10
 ②村山槐多論 世界 47・3
 ③洋画図版解説 (日本絵画館・大正篇) 講談社 46・6
 ③川上冬崖 神奈川県立近代美術館・高橋由一展目録 46・7
 ③辻永の世界 茨城県立美術博物館・辻永展目録 46・9
 ③万鉄五郎<近代日本美術家の文献紹介> 現代の眼 204 46・11

川 上 涇 (資料室)

V 研究活動及び事業

- ①渡来絵画 (日本絵画館12, 共著) 講談社 46・10
- ②祁多佳の画蹟 上 美術研究 279 47・3

田 實 榮 子 (資料室)

- ①小袖 (日本の美術67) 至文堂 46・12
- ②桃山・江戸前・中期の産衣十三領について 下
一近世小裁・中裁衣類調査報告一 美術研究 280 号 47・3

江 上 綏 (資料室)

- ②興福寺蔵紺紙金字成唯識論の莊嚴画 美術研究 277 46・9
- ⑤平安時代料紙装飾の美 美術部公開学術講座 46・10

関 口 正 之 (資料室)

- ②1970年の歴史学界一回顧と展望一 (日本古代・美術史の項)
史学雑誌80-5 46・5
- ②文化庁保管愛染明王画像 美術研究 280 47・3
- ③世界美術小辞典 (日本絵画, 古代・中世の項) 芸術新潮 262・263 46・10, 11
- ④細見家蔵愛染明王画像について 美術部研究会 46・4

河 野 元 昭 (資料室)

- ③谷文晁筆瀑布図 国華 930 46・2
- ③円山応挙筆東山三絶図 国華 936 46・7
- ③立原杏所筆東照神君図 国華 940 46・10

中 村 伝三郎 (主任研究官)

- ②荻原守衛一その生涯と芸術一 (中) 4 美術研究 279 47・3
- ③現代日本彫刻への道 求美 7 46・4
- ③近代日本の彫刻一その黎明期一 視る49 46・6
- ③大久保実雄の人と画業 大久保実雄画集 47・3

⑥たいどう彫刻村 春の野外彫刻展	三彩 274	46・7
⑥戦後彫刻と共に—彫刻応援団長の弁—(1)(2)	絵 91・92	46・ 9, 10
⑥二科展・行動展彫刻評	新美術新聞 1	46・9
⑥新制作展・一陽会展彫刻評	新美術新聞 2	46・10
⑥日展第三科(彫塑)評	新美術新聞 3	46・11

上 野 ア キ (主任研究官)

②エルミタージュ博物館所蔵ベゼクリク壁画誓願図について	美術研究 279	47・3
③トルファン壁画誓願図(美の美)	日本経済新聞	46・5
③日本美術史 7〜9	プリンターズサークル 3-6, 8, 10	46・ 4〜9
⑥原田淑人博士著「増補漢六朝の服飾」「唐代の服飾」	考古学雑誌 56-4	46・3

E 科学研究費題目

(IV 予算 2 科学研究費補助金交付決定額の項参照)

(2) 芸 能 部

芸能部は、日本の伝統芸能の保存に資するために必要な基礎的理論的研究を行なう。

芸能部は、演劇研究室・音楽舞踊研究室・郷土芸能研究部の三室より成る。

演劇研究室においては、日本古典演劇(主として歌舞伎・人形浄瑠璃などの近世演劇)を、音楽舞踊研究室においては、日本古典音楽及び日本古典舞踊(雅楽・声明・平曲・能・邦楽・邦舞など)を、郷土芸能研究室においては、全国各地に分布して伝統芸能の源流や展開の過程を示す民俗芸能を、それぞれの研究対象とする。

各室の研究目標としては、以上の諸芸能の理念・構造・技法・技術及びその継承保存に関する研究などがあり、その研究に必要な資料の収集・整備、記録の作成としての撮影・録音などの作業を行なう。また研究の結果は、刊行・講演会の開催などによって公表する。

A 研究・調査活動の概要

V 研究活動及び事業

芸能部全員による共同研究としては、前年度に引き続き、歌舞伎音楽の研究を行った。前年度までに終了した付帳写真資料の整備により、パンチカードに記入し、分析・索引の資料を作製した。

次に各研究室におけるおもな研究調査活動を挙げる。演劇研究室においては、(1)各地の大学・図書館所蔵の演劇資料の調査・撮影・整理を続け、(2)農村舞台・かけ踊りの調査・録音・撮影を行なった。また芸能部録音室において、歌舞伎囃子の演奏を録音した。なお別に雑誌「歌舞伎新報」の索引刊行の準備を始めた。

音楽舞踊研究室においては、(1)語り物芸能の研究、(2)寺院行事の研究、(3)能の様式の研究を行なった。(1)については、黒川能王祇祭の調査・録音・記録を行ない、天台宗・黄檗宗・華嚴宗の諸法会における講贊・論義・授戒等の語り物的要素を調査・録音した。(2)については、南部諸寺・万福寺・延暦寺等の主要行事を調査した。特に41年度以降、継続的に研究調査を実施して来た東大寺修二会については、ビクターレコード「東大寺
修二会観音悔過（お水取り）」の製作を監修し、構成・解説を担当した。このレコードは、本年度芸術祭において、優秀賞を授けられた。(3)については、前年度に引き続き、能楽全般にわたる構成および技法の研究成果を公表する準備を行なった。その他、義太夫節の曲節型について、従来の曲節型名にとらわれずに新たな解析を試みるための準備を行なった。なお、芸能部録音室において、一噌幸政・田中一次の演奏により、能の笛のアシライ吹きの各旋律型を録音した。

郷土芸能研究室においては、沖縄への渡航を初め、各県に出張しての実地調査のほか、東京における全国民俗芸能大会や、ブロック別の地方大会に出場した芸能の撮影・録音などを行なった。また民謡歌詞集成の研究については、各地伝承の民謡歌詞を既刊書目・現地調査資料等から収集する作業を続けた。なお芸能部録音室において、大神楽鏡味派家元鏡味小仙一座の演奏により、同家伝来の古曲のうち、掛け合いの曲目4種を録音した。

別に、音楽舞踊・郷土芸能の各研究室においては、安原コレクション邦楽レコードの整理を続け、それぞれ「音盤目録」Ⅲ・Ⅳの刊行の準備を進めた。

なお、各研究室は人員寡少のため、随時、他の研究室員の応援参加によって作業を進め、「芸能の科学」3として、「芸能論考」1を刊行した。

B 研究 題 目

浦 山 政 雄 (芸能部長)

〔Ⅰ〕 近世戯曲の系統的研究

歌舞伎脚本・浄瑠璃丸本・役者評判記・番付類の基礎資料により、近世戯曲の歴史的変遷を系統別に検討する。

〔Ⅱ〕 歌舞伎演技譜の研究

歌舞伎の演技の記録を、音楽の譜と並行する総合的な演技譜として完成するための基礎的研究。

〔Ⅲ〕 歌舞伎音楽の研究 (共)

歌舞伎囃子付帳の分析研究により、歌舞伎演出史を総合的に研究する。

前 嶋 茂 子 (演劇研究室)

〔Ⅰ〕 かけ踊の研究

かけ踊の発生と変遷および現状を明らかにする。

〔Ⅱ〕 関東の神楽の研究

能の型付を基本に考え、神楽譜を作成する。

〔Ⅲ〕 能の様式の研究 (共)

年間研究調査活動の概要欄に記したとおりである。

〔Ⅳ〕 歌舞伎音楽の研究 (共)

年間研究調査活動の概要欄に記したとおりである。

宮 本 瑞 夫 (演劇研究室) 研究員 (非)

〔Ⅰ〕 地方芸能文化史における舞台の研究

全国に分布する農村舞台のうち、とくに床下に臼を敷く習俗をもった舞台の調査研究。

〔Ⅱ〕 近松周辺の浄瑠璃作者の研究

紀海音・錦文流・西沢一風など近松の周辺作家について、その作品・作風・作者の研究。とくに一風の浄瑠璃本の調査に重点を置いた。

〔Ⅲ〕 享保期歌舞伎の研究

歌舞伎台帳・役者評判記などにより、享保期の歌舞伎を研究する。とくにト書・舞台書による演出・舞台構造の基礎的調査に重点を置いた。

横道 萬里雄 (音楽舞踊研究室長)

〔I〕 語り物芸能の研究 (共)

年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

〔II〕 能の様式の研究 (共)

年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

〔III〕 歌舞伎音楽の研究 (共)

年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

〔IV〕 各宗派声明・寺院行事の比較研究

佐藤道子技官を中心とする研究に参加・協力した。

佐藤 道子 (音楽舞踊研究室)

〔I〕 語り物芸能の研究 (共)

年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

〔II〕 寺院行事の研究

寺院行事が内包する多種多様な要素の中から、芸能的要素を抽出し、各宗各派にわたる総合的比較研究を行ない、その変遷・分化をあとづける。

(1) 各宗派声明の比較研究

各宗派に共通の声明について、用法・奏演形式・発声法等の分析研究を行ない、その異同を明らかにし、特定宗派の独特な声明については、同様の方法で特色を明らかにする。

(2) 寺院に存在する呪師芸の研究

呪師芸と芸能との関連をたどるため、密教行事を中心として、寺院行事に現存する呪師芸について調査研究を行なう。

〔III〕 能の様式の研究 (共)

年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

〔IV〕 歌舞伎音楽の研究 (共)

年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

松 本 雍（音楽舞踊研究室）研究員（非）

〔Ⅰ〕 語り物芸能の研究

年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

〔Ⅱ〕 能の脚本史の研究

能の脚本上の一歩大きな特徴である〈二場形式〉について、その発生過程を探ろうとする研究。

〔Ⅲ〕 能の様式の研究（共）

年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

三 隅 治 雄（郷土芸能研究室長）

〔Ⅰ〕 念仏芸の研究

全国に分布する民俗芸能のうち、特に分布範囲の広い念仏芸系統の現状と、その伝播・変遷の経路を明らかにする研究。今年度は小歌踊の研究を主とした。

〔Ⅱ〕 沖縄の民俗芸能の研究

沖縄諸島に伝承される民俗芸能の分布についての調査と、芸能の分類に関する研究。

〔Ⅲ〕 歌舞伎音楽の研究（共）

年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

〔Ⅳ〕 民謡歌詞集成の研究（共）

年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

仲 井 幸 二 郎（郷土芸能研究室）研究員（非）

〔Ⅰ〕 郷土芸能の研究

前年度に引きつづき、民俗芸能の行なわれる場所のうち、特に「境」を取り上げ、古代信仰、民俗生活との関連において「境で行なわれる芸能」の意義を明らかにせんとする研究。

〔Ⅱ〕民謡の研究

「民謡の民俗学的研究」「民謡研究の目的を究明する研究」の一端として、民謡歌詞、民謡集書目、民謡文献資料等の分類・調査、及び特に芸謡的要素を持つ民謡に関する研究。

〔Ⅲ〕話芸・寄席芸の研究

邦楽レコードの分類により、落語を主として話芸・寄席芸を対象とする近世芸能の研究。

〔Ⅳ〕民謡歌詞集成の研究（共）

年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

C 研究・調査活動（昭46・4～昭47・3）

浦山政雄（芸能部長）

近世戯曲の系統的研究のため、阪急学園池田文庫などの歌舞伎台帳を調査し、東京大学図書館・東京芸大図書館・国立国会図書館などの番付類を調査、このうち東大所蔵の紋番付の撮影を完了した。また故岸本一郎氏所蔵の上方番付を調査し、これを収蔵した。

芸能部録音室において、杵屋栄左衛門・松島庄十郎らによる江戸系歌舞伎囃子の演奏を録音し、歌舞伎音楽の研究及び歌舞伎演技譜の研究の資料とした。

前嶋茂子（演劇研究室）

盆に行なわれている「かけ踊」調査のために、長野県下伊那郡天竜村坂部・上村下栗・秦草村森平野等の盆踊・くれ木踊の録音・撮影を行なった。

神楽譜作成のため、埼玉県北葛飾郡鷺宮町鷺宮神社で行なわれている催馬楽神楽の8m/m撮影を行なった。

また、大神楽鏡味派鏡味小仙家に伝わる古曲四種を所内録音室で録音した。

宮本瑞夫（演劇研究室）研究員（非）

農村舞台の研究のため、栃木県安蘇郡葛生町下牧・同県鹿沼市奈佐原町・愛知県豊田市猿投町西広見・香川県小豆郡池田町中山・佐賀県神埼郡神埼町の近世劇舞台およ

びその芸能を調査・記録した。

近松周辺の作家研究では、東京芸大図書館・実践女子大図書館・早大図書館・演劇博物館・国立国会図書館・東洋文庫・都立日比谷図書館（加賀文庫）・市立西尾図書館（岩瀬文庫）・市立鎌倉近代美術館などで、主として浄瑠璃本の所在調査・書誌的研究・写真撮影を行なった。

享保期歌舞伎の研究では、歌舞伎台帳の「傾城妻恋桜」「松風」「けいせい豊鶴石」「けいせい嵐山」などにより、ト書・舞台書カードを作成・整理した。

その他、雑誌「歌舞伎新報」の索引カードを作成・整理した。

横 道 萬 里 雄（音楽舞踊研究室長）

語り物の研究・能の様式の研究および歌舞伎音楽の研究については、年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

各宗派声明・寺院行事の研究については、東大寺・薬師寺・新薬師寺・法華寺・万福寺等についての調査を行なった。また、「^{東大寺}_{修二会}観音悔過（お水取り）」と題するビクターレコードの製作を監修し、構成・解説を行なった。

佐 藤 道 子（音楽舞踊研究室）

東大寺修二会については、41年度以降、継続的に研究調査を実施しているが、本年度は、ビクターレコード「^{東大寺}_{修二会}観音悔過（お水取り）」の製作監修、および構成・解説を行なった。これと関連して、悔過会を中心に南都諸寺の法要行事の調査を行ないつつある。本年度は、薬師寺花会式・新薬師寺修二会・法華寺雛会式・長谷寺修正会についての調査を行なった。

また、延暦寺の主要行事の調査を、44年度から実施しているが、本年度は、法華大会・元三会について調査を行なった。

その他、東大寺地蔵会・解除会、万福寺年中行事の基礎調査および施餓鬼会・宗祖遠忌諸法要の調査を行なった。

語り物芸能の研究、能の様式の研究および歌舞伎音楽の研究については、年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

松 本 雅 (音楽舞踊研究室) 研究員 (非)

能の脚本様式の点では典型と云われる脇能を取り上げて、作品の分類・分析をおこない、いくつかの類型を抽出して脇能の歴史を想定した。

また、演能調査として東京(鉄仙会・宝生会・三春会等)や名古屋(中日五流能)等の舞台を記録・録音した他、古い能の姿を探る手掛りとして山形県の黒川能を調査し、記録・撮影・録音を行なった。

語り物芸能の研究・能の様式の研究については、年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

三 隅 治 雄 (郷土芸能研究室長)

小歌踊の研究のため、本年度はササラ踊(千葉県)・神事踊(三重県)・バンバ踊(岡山県)・雨乞踊(鳥取県)等を調査し、写真・録音資料等を蒐集した。

沖縄の民俗芸能に関しては、九学会連合の沖縄総合調査(文部省科学研究費総合研究による)の一員として、沖縄本島におもむき、約20日間にわたって、本島内の民俗芸能を調査した。また、所内において沖縄現地から蒐集した資料を分析研究した。

その他、例年の通り、全国民俗芸能大会や地方のブロック別民俗芸能大会に出席し、調査研究を行なった。

また、大神楽鏡味派家元鏡味小仙家に伝わる大神楽の古曲のうち、掛け合いの曲目4種を所内録音室で録音し、記録をまとめた。

歌舞伎音楽の研究および民謡歌詞集成の研究については、年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

仲 井 幸 二 郎 (郷土芸能研究室) 研究員 (非)

民謡の研究に関しては、民謡集や民謡文献資料のカード作製・分類を、引きつづき行なっている。

「民謡伝播の跡づけ」「杵築と宗像の神」等の研究を目的として、平戸・松浦・宗像地方の現地採集調査を行なった。

民謡歌詞集成の研究については、年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

D 主要研究業績

①：著書 ②：論文 ③：解説
④：研究発表 ⑤：講演・放送 ⑥：その他
昭46・4～昭47・3

浦山政雄(芸能部長)

- | | | |
|--------------------|---------------------|-------|
| ①日本演劇史(共著) | 桜楓社 | 47・3 |
| ②濡れ場と殺し場の思想 | 学燈社「国文学」 | 46・9 |
| ③浄瑠璃と端唄 | 帝国劇場プロ | 46・5 |
| ③鶴屋南北全集 | 芸能 | 46・7 |
| ③文楽義太夫「冥途の飛脚」レコード評 | 芸能 | 46・12 |
| ③横山正著「浄瑠璃集」書評 | 週刊読書人 | 47・1 |
| ③「難波土産」解説・訳 | 日本の古典19「近松門左衛門」河出書房 | 47・3 |
| ⑤鶴屋南北の味 | 伝統芸術の会 | 46・7 |
| ⑤日本の芸能 | 東京教育大学 | 46・8 |
| ⑤邦楽と現代 | 三越劇場 | 46・9 |
| ⑤日本音楽道しるべ「狂乱物」 | NHK F M | 47・3 |

前嶋茂子(演劇研究室)

- | | | |
|-----------|--------|-------|
| ②かけ踊の研究 | 芸能の科学3 | 47・3 |
| ②鷺宮の催馬楽神楽 | 青洲 | 47・3 |
| ⑤大神楽の系図 | 朝日講堂 | 46・12 |

宮本瑞夫(演劇研究室)研究員(非)

- | | | |
|--------------------------------|------------------------|---------------|
| ②東北地方の歌舞伎舞台 | 「農村舞台の総合的研究」桜楓社 | 46・4 |
| ②佐渡の地芝居 | 「農村舞台の総合的研究」桜楓社 | 46・4 |
| ②農村歌舞伎舞台仮設の一形式一舞台下に臼を敷く民俗についてー | 芸能の科学3 | 47・3 |
| ③民俗・風俗項目 | 「大日本百科事典ジャポニカ17～18」小学館 | 46・6
46・9 |
| ③民俗・風俗項目 | 「現代世界百科事典1～2」講談社 | 46・10
47・2 |
| ④臼と農村舞台 | 日本近世文学会 | 46・10 |

V 研究活動及び事業

⑤農村舞台のフォークロア

下野民俗研究会 46・5

横道 萬里雄 (音楽舞踊研究室長)

- ②二月堂処世界日記注解—長禄本処世界日記— 芸能の科学 3 47・3
- ⑤青少年劇場能楽公演での講演 愛知・三重・奈良・千葉県 46・7
- ⑤翁・三番叟 日本舞踊協会研修会 46・8
- ⑤能の発声法 T.B.S ラジオ 46・11
- ⑤日本音楽道しるべ「弁慶物」 NHK ラジオ 47・2
- ⑥能「鷹姫」上演立合 大阪サンケイホール 46・7
- ⑥レコード「^{東大寺}二月堂観音悔過 (お水取り)」構成・解説 日本ビクター 46・10

佐藤 道子 (音楽舞踊研究室)

- ④南都の悔過会 東洋音楽学会・音楽学会 46・12
- ⑤南都の声明—悔過会について— 近松の会 46・6
- ⑤法隆寺の悔過会と舞楽法要 東京国立文化財研究所開所記念講演 46・11
- ⑥レコード「^{東大寺}二月堂観音悔過 (お水取り)」構成・解説 (共) 日本ビクター 46・10

松本 雍 (音楽舞踊研究室) 研究員 (非)

- ②能における神楽の研究—「巻絹」から「竜田」まで— 芸能の科学 3 47・3
- ③能の鑑賞 筑摩書房 邦楽大系 2 46・5
- ④シテ方五流の流儀差について 能楽懇談会 46・9
- ④能と狂言の巫子神楽 朝日講堂 46・12
- ⑥今月の舞台から 能楽タイムズ 231・235・239 46・6
47・2

三隅 治雄 (郷土芸能研究室長)

- ①沖縄文化史辞典 (共編著) 東京堂出版 47・1
- ②芸能史の花「花と日本文化」 小原流出版部 46・10
- ②民俗舞踊の源流 「国際文化」209号 46・11
- ②民俗芸能—伝統と現代— 「淡交」2692 47・2

②沖繩の演劇「組踊」	「演劇界」30の1	47・1
②沖繩の民俗芸能の分布と分類	「人類科学」24	47・3
③万作芝居とその周辺の芸能	国立劇場プログラム	46・12
③大神楽の曲芸	民族芸能68	46・12
③信州の芸能	信濃毎日新聞	47・ 1～3
③二本松石井の七福神と田植踊	「自然と文化」8	47・1
③民俗芸能と太鼓	「日本の太鼓」2集 CBS ソニー	47・2
③南日本の芸謡	「折口信夫全集ノート編」月報 中央公論社	47・2
③芸能に生きる島	「沖繩の歴史」朝日新聞社	47・3
④沖繩の民俗芸能の分布と研究の方向	九学会連合大会	46・5
④シンポジウム「音楽と地域性」	東洋音楽学会大会	46・10
⑤民謡随想	NHK ラジオ	46・ 8～9
⑤沖繩の歌劇	NHK ラジオ	46・8
⑤芸能史と沖繩	九学会連合沖繩講演会	46・8
⑤風流	NHK TV	47・1
⑥国立劇場民俗芸能公演「日本の民俗劇」監修		46・12
⑥国立劇場公演「御冠船踊と琉球歌劇」構成		47・3

仲井幸二郎（郷土芸能研究室）研究員（非）

②芸謡の周辺 I	芸能14-3	47・3
③芸謡と小歌と	「折口信夫全集ノート編」18月報	47・1
⑥「折口信夫全集ノート第18巻芸謡・小歌」編集	中央公論社	47・1

E 科学研究題目

（IV予算2 科学研究費補助金交付決定額の項参照）

(3) 保存科学部

文化財の材質・構造・技術の科学的研究、並びに文化財のおかれている保存環境の

V 研究活動及び事業

科学的研究を行ない、これを基盤として文化財の保存と修復に関する技術的研究をしている。換言すれば、文化財の自然科学的研究、文化財を資料とする科学技術史的研究、文化財の保存と修理のための科学技術の応用研究の三方面がある。

研究組織としては、化学研究室・物理研究室・生物研究室・修理技術研究室の4研究室からなっている。

化学研究室

文化財及びその保存に関する化学的及び分析的調査研究並びにその結果の公表に関する事務をつかさどると規定されている。即ち文化財を構成している各種素材の同定・分析から老化・崩壊過程の究明とその防止の化学的研究である。分析には微量分析及び非破壊分析を主として行っており、老化防止・強化・接着等には合成樹脂等の応用開発に主力を注いでおり、又空気汚染の文化財への影響或は防虫防霉剤の適否についての研究を行なっている。

物理研究室

文化財及びその保存に関する物理的調査研究並びにその公表に関する事務をつかさどると規定されている。文化財自身の構造・強弱・安定等研究のため、材料試験を行ない或はX線写真・γ線写真等の特殊撮影を応用し、又、文化財の保存環境に関し、採光・照明・温湿度等の文化財に及ぼす影響とその防止の研究を行なっている。例えば美術品の博物館内での展示、収蔵庫内での収蔵及び梱包輸送に関し適正条件の設定と調節技術を開発している。

生物研究室

文化財及びその保存に関する生物学的調査研究並びにその結果の公表に関する事務をつかさどると規定されている。文化財に使用され又随伴している動植物的材質の判定を行なうとともに黴及び菌・昆虫等による文化財の黴害・菌及び虫害の防除のため保存環境の改善並びに黴及び菌・昆虫等の採取・同定・培養並びに殺菌・殺虫のための薬剤と装置の開発を行なっている。

修理技術研究室

文化財の修理に関する科学的・技術的調査研究及びその結果の公表に関する事務をつかさどると規定されている。多種の絵画・彫刻・工芸品は勿論、木造建造物の天井・壁に描かれた絵画、柱・梁・組物等の彩色装飾及び障壁画並びに彫刻的細部から石

造建造物の修理に及ぶ極めて広範囲の内容が対象とされている。したがって、化学・物理・生物の各研究室の協力のもとに調査研究が進められる。技術的には修理文化財を、(1)板絵・彩色木工品・漆芸品、(2)紙布に描かれた絵画、(3)土器・陶磁器・金工品・石造物の三種類に概ね分けることができる。調査研究は、現地へ出張する場合と、保存科学部アトリエ内に文化財を移動の上行なう場合とがある。アトリエは文化財修理の病室や治療室・手術室の役目を果して、ここでは徹底した科学的調査研究と、科学的処理を以って周到な修理が可能である。同時に過去の技術の復原と伝統技術の検討がなされる。

A 研究・調査活動の概要

前年度の施設の拡充・整備に次いで、昭和46年度には内部に若干の人事移動が行なわれ、研究態勢の再編・合理化がなされた。

特別研究としては昭和46年度より「書院造等障壁画保存の科学的調査研究」をとりあげ、新たに3ヶ年計画で研究に着手した。京都に数ヶ所の書院造建築を選び、その中における障壁画の保存環境の長期観測、既往剥落止め処置の現状調査、虫・微害調査などを行なうと共に、彩色層剥落の原因機構、紙・絵具・膠などの材質劣化、襖に関する枠・下地・表装の構造的問題、障壁画に関する伝統的技法等を実験的に又文献的に考究している。前年度において一応研究を終了した「陳列室並びに収蔵庫の室内温湿度及び汚染空気が美術品に及ぼす影響とその防除についての研究」に関しては46年度「保存科学」第8号において、総合的報告を行なった。

受託研究では、前年度に引き続き加曾利貝塚の遺跡保存の研究を行なった。残された問題として、土壌表面に出る白色の析出物をとめることに主眼をおき、まず地表から空中への水分移動を止める色々な企を試みている。46年度受託研究で手がけた合成樹脂による剥落止め科学処置は

羽黒山合祭殿内板戸絵彩色（山形県）

荒川神社船絵馬（新潟県）

唐招提寺金堂天井彩色（奈良県）

などである。

日光東照宮陽明門両袖外壁牡丹羽目下から発見された唐油画についての研究も受託

研究の粋で行なった。東側面では修理のため牡丹羽目がとり外され唐油画は直接観察し得るので、これについては材質調査を行ない油材質、顔料の種類等が判明した。西側は牡丹羽目がとり外されることなく、修理が既に終わっているが、X線透視により大和松岩笹籠鶴の図が中に存在することが明らかとなった。又東側面錦花鳥図の下にも牡丹唐草の図柄の一部が残っていることが透視により分った。

国宝如庵の移築修理については、この年度は現地において古部材の強化・補修・欠損補足等の技術指導を行ない、古材再使用による移築に新手段を確立した。マイクロバルーンとエポキシ樹脂のコンパウンドを使用して、前年度旧富貴寺塔婆初重の復元が行なわれたが、今回はこの方法に更に外面仕上を極めて精密に行ない補修部の判別が出来ない位にした。移築組立終了後樹脂加工結果確認のためX線透視を行なった。又石灯籠6基が庵に従って移動されたが、その補強補修も行なっている。

九州彩色古墳保存に関してはほぼ前年度の研究を継続。

蛍光X線・X線回折等非破壊法による材質分析では金沢市成巽閣色壁に関する研究に興味あるもので、ウルトラマリン・朱などが検出され修理方針確立に寄与した。

文化財保存環境については数年に亘り特別研究でもとり組んでいるが、空気汚染ガス・塵埃、生物汚染などにつき恒常的な研究を続けている。又展示、収蔵施設など近年新設されるもので、内部の環境を測定してみても未だ良好でないうちに開館を急ぐ場合が多い。このような環境測定、時としては悪条件に対応する対策樹立などを實際施設の数ヶ所につき行なった。

B 研究 題 目

登 石 健 三 (保存科学部長)

〔I〕 コンクリートより発散される苛性粒子の研究 (共)

存否のテスト法、粒子の基礎的性質の研究を引続き行なっている。気体圧力計に現われる反応が今のところ最も顕著であるが現象は極めて複雑でまだ全容は掴めない。

〔II〕 X線γ線による文化財内部構造欠陥等の透視研究 (共)

日光東照宮陽明門袖壁下の唐油画についての研究は受託研究として総合的に調査したがこの際X線透視により現在かくれている絵画の存在様相を明かと

した。又如庵移築組立後X線透視を行ない、補強補足処置の適性確認を行なった。

〔Ⅲ〕 展示施設・収蔵施設内の保存環境（共）

新施設内の保存環境は一般によくないことが多い。この年度ではその際行なうべき実際上の対策を研究し方法を確立した。

〔Ⅳ〕 初期油彩画に関する科学的方法を含む美術史的研究（共）

46年度科学研究費を受け美術部・保存科学部数名の研究グループの総括を行なった。

〔Ⅴ〕 特別研究「書院造等障壁画保存の科学的調査研究」総括

江 本 義 理（化学研究室長）

〔Ⅰ〕 文化財の材質に関する研究

非破壊的分析法および微量試料による分析法の検討とその感度、精度向上に関する研究。

X線分析・赤外線分析・熱分析などによる文化財の広範囲の材質の判定、変質・劣化および技法に関する研究。

紀年銘、年代、産地の標準的文化財の材質に関するデータの収集。

〔Ⅱ〕 考古遺物・遺跡に関する考古化学的研究

遺物の材質研究ばかりでなく、埋蔵環境と埋蔵時、出土後の遺物の変質との関連、遺構の変質、劣化の機構や過程を、さび・折出物などから究明する。

出土遺物の変壊生成物に関する考古化学的研究（科研費・一般研究C）

〔Ⅲ〕 空気汚染の文化財に及ぼす影響に関する研究

ガスクロマトグラフィー、アルカリ炉紙法などによる汚染因子、汚染度の測定、金属試片の大気腐食度による影響の判定と汚染因子の防除法、並びに保存環境調査、被害状況調査。

門 倉 武 夫（化学研究室）

〔Ⅰ〕 文化財の保存環境に関する研究

空気汚染が文化財に及ぼす影響について究明するため、文化財環境中のイオ

V 研究活動及び事業

ウ酸化物、窒素酸化物、炭酸ガス、じんあいなどの汚染因子を測定し、汚染の成因、挙動、経年変化等について検討。

一主としてイオウ酸化物、窒素酸化物の室内外における挙動について一

〔Ⅱ〕 特別研究、「書院造等障壁画保存の科学的調査研究」

書院造建造物内の保存環境（空気汚染分担）

〔Ⅲ〕 文化財の材質研究に対するC H N元素分析計，ガスクロマトグラフィーの応用研究

漆、油の分析法に関する研究。

〔Ⅳ〕 文化財の公害環境及び被害の実態調査（科学研究費一般研究・D）

アンケート方式による実態調査を行なう。

見 城 敏 子（物理研究室）

〔Ⅰ〕 温湿度，日光による文化財の材質への影響と保存法

紙，漆塗膜，膠，顔料，油絵等各温湿度中における物性の経時変化を測定し，その保存対策を研究する。（共）

〔Ⅱ〕 漆塗膜の硬化，劣化過程と古代漆との関連の研究

特殊な方法で赤外線吸収スペクトルを測定し研究する。

〔Ⅲ〕 密陀絵の研究（共）

密陀絵の材料とされている唐油の作り方の見込み実験をし，あわせて材料の劣化実験を行なう。

〔Ⅳ〕 特別研究「（書院造等障壁画保存の科学的調査研究）」

膠の劣化の調査研究を分担

膠膜を各温湿度に放置し，粘弾性及び赤外線吸収スペクトルによる変化を測定しその保存対策を研究する。

〔Ⅴ〕 展示施設，収蔵施設の保存環境調査（共）

石 川 陸 郎（物理研究室）

〔Ⅰ〕 青銅美術品の製作技法に関する研究

鋳造時における金属の組織および加工性を知り製作技法を探究する。

〔Ⅱ〕 遺跡保存に関する研究

遺構表面、貝塚断面などの崩壊防止のための温湿度調節による研究。

〔Ⅲ〕 X線 γ 線による文化財内部構造、欠陥等の透視研究

医学におけるレントゲン透視と同様に文化財内部の様相を知って製作技法、修理状況構造上の欠陥などを知る。

〔Ⅳ〕 油彩画の表面劣化に関する研究（科学研究費一般研究Bによる）

画面に亀裂が出来るがその原因と対策の研究。

〔Ⅴ〕 特別研究「書院造り等障壁画保存の科学的調査研究」環境部門一部分担

新 井 英 夫（生物研究室）

〔Ⅰ〕 文化財劣化の微生物学的研究

文化財の生物劣化を微生物学的観点から研究する。すなわち、各種材質の劣化要因となっている微生物の分離ならびにこれら微生物を環境条件に関する基礎的研究を行う。

〔Ⅱ〕 文化財の生物劣化防除に関する研究

微生物・昆虫による文化財の生物劣化が著しいが、これら生物の防除を目的とし、各種薬剤の殺虫・殺菌に必要な条件設定のための基礎的研究を行なう。

〔Ⅲ〕 減圧滅菌器内の湿度調節

減圧滅菌の際には急激な減圧状態が形成される。この時の内部湿度の変化が文化財材質に悪影響を及ぼすと考えられるので、使用に先だって減圧時の内部湿度の変化を測定し、内部湿度調節の方法を研究し実験する。

江 本 義 数（生物研究室）研究員（非）

〔Ⅰ〕 国宝、重要文化財の微害調査と防除

- （1） 空中微生物の採取、その培養と種の決定。
- （2） 美術品に発生した菌の培養、防除と美術品の保存方法。

〔Ⅱ〕 菌類の分類と菌株保存

収蔵庫、絵画等から採取した菌の分類と保存。

〔Ⅲ〕 展示室及び収蔵庫内の温湿度と菌の関係

岩 崎 友 吉 (修理技術研究室長)

- 〔Ⅰ〕 出土木製品の保存処置に関する研究 (共)
- 〔Ⅱ〕 出土金属製品の保存処置に関する研究 (共)
- 〔Ⅲ〕 遺跡の保存処置に関する研究 (共)
- 〔Ⅳ〕 古代ガラスの研究
- 〔Ⅴ〕 和紙の保存に関する研究
- 〔Ⅵ〕 絵画資材の研究
- 〔Ⅶ〕 文化財保存に関する術語集成
- 〔Ⅷ〕 文化財の科学的保存技術の国際的基準に関する研究

中 里 寿 克 (修理技術研究室)

- 〔Ⅰ〕 文化財の伝統的技法の調査および記録作製
文化財の修理保存の前提となる技法と施工工程を究明し体系化する。材質及破損原因の究明も行なう。
- 〔Ⅱ〕 平安鎌倉時代漆芸技法の実証的研究
主に平安鎌倉時代の漆芸についてX線、実体顕微鏡等を用い材質、構造、施工法の調査研究を行なう。
- 〔Ⅲ〕 日本古代漆芸品の技法的研究
縄文、弥生、古墳時代の漆芸品について材質、技法、施工工程を研究する。
- 〔Ⅳ〕 障壁画の技法に関する研究 (共)
特別研究「書院造り等障壁画保存の科学的調査研究」の一部を分担し、絵画の技法、襖の製法について調査する。

茂 木 曙 (修理技術研究室)

- 〔Ⅰ〕 文化財の科学的保存技術の研究
主に建造物関係の彩色等の合成樹脂による剥落どめの技術的研究。
- 〔Ⅱ〕 受託研究による文化財の科学的保存処置のための技術的研究

樋 口 清 治 (主任研究官)

〔Ⅰ〕 木造建造物修理における合成樹脂の利用に関する研究

脆弱木材の合成樹脂含浸による強化、欠失部の樹脂による補加、整形及び F.R.P.による補強などにより、再び建築部材として使用する実験的研究

〔Ⅱ〕 出土鉄製品保存処置方法の研究

防錆用アクリルエマルジョンの減圧含浸及びマイクロバルーンとセメダイン C の混合物で、整形し、考古学的な復原をする。

〔Ⅲ〕 緑泥片岩や凝灰岩等の材質からなる石造文化財の保存処置方法の研究

〔Ⅳ〕 補修用の新しい絵絹に、放射線照射をして劣化させ、修理に使用するに適切な脆弱性を附与させる研究（共）

〔Ⅴ〕 障壁画の保存に関する研究（共）特別研究

障壁画の剥離、剥落の原因および過去になされた合成樹脂による剥落止め処置の影響に関する研究。

C 研究・調査活動（昭46・4～昭47・3）

登石健三（保存科学部長）

新施設発足に際し、内部保存環境の測定と改善とがしばしば必要である。この年度中には国立公文書館、埼玉県立博物館、浜松市立美術館、京都市美術館収蔵庫、他二三の私立美術館の開館に対する相談を受け、環境状態の測定、改善対策の樹立指導等を行なった。東京国立博物館収蔵庫、奈良国立博物館、熊本県立美術館の建設に関しても事前の協議に参画している。又既設の展示館における特別展覧会でも内部環境特に湿度調節には格別の配慮を必要とするが、東京及び京都国立博物館で催された「ソ連所蔵名品百選展」においては恒湿保持のため特別の対策を構じた。ヨーロッパにおける御物展、東京国立博物館における平安彫刻展についても恒湿保持対策で協力した。

国宝如庵の移築に関しては移築後、強化処置確認のため現地犬山においてX線による透視調査を行なった。

日光東照宮陽明門袖壁の唐油画についての受託研究の一部としてX線透視を行ない、東面錦花鳥図下には牡丹唐草の図柄の一部を、西側牡丹羽目下には大和松岩笹籠鶴

図の存在することを確認した。

加曽利貝塚の遺跡保存処置に関しての受託研究の一端として、地表における析出物防止の企を計画、この部分のみ空気湿度を高湿に保つ試みを行なっている。

江 本 義 理 (化学研究室長)

材質研究 可搬式蛍光X線分析装置による調査は、科学研究費（一般研究B）によるものとして長崎県立美術館において、初期洋風画8点につき彩色顔料の非破壊的分析（46・11）、又東京天理ギャラリーにおいて中国青銅器6点につき同様分析を行なった。（46・11）

金沢市成巽閣の色壁修理に際し7色の色壁に使用されている顔料（46・6～9）新潟県荒川神社絵馬の彩色顔料のX線分析を行なった（47・2）

日光東照宮唐油絵の調査は、現地で顕微鏡写真、紫外線蛍光カラー写真撮影（46・12）、採取した試料につき材質分析、油脂分の分析などを行なった。

44年度から継続の装飾古墳保存対策研究会に今年度も参加した。（46・5、47・2）

考古化学 科学研究費（一般研究C）の交付を受け、変質析出物などにつき宮崎市、西都市所在の横穴古墳、臼杵市、大分市の石仏群の調査（47・2）、天理大学参考館において磚、墓誌、テラコッタ、ガラス器などについて調査（47・2）を行なった。また浜松市伊場遺跡の発掘時において、埋蔵環境調査の一環としてサンプリング、測定を行なった。

空気汚染の影響、保存環境 大垣市、徳勝寺の梵鏡に関し調査を開始した。（46・4）

特別研究費による書院造り等の障壁画の保存対策に関する調査として京都市二条城、知積院、大覚寺、などの襖絵、板絵を調査、テストピースの設置を行なった。（47・1）

従来からの各地の保存環境の汚染度の測定は継続して行ない国立公文書館書庫の環境調査を行なった。

門 倉 武 夫 (化学研究室)

当研究所新館非破壊分析室、収蔵庫、保存科学部旧館二階及び屋外の新館屋上、旧

館西側外等でイオウ酸化物、窒素酸化物、浮遊粉じんを測定し、汚染因子の挙動について検討。

文化財環境空気中の汚染度を知るため、京都国立博物館、平等院、徳勝寺、高德院、根津美術館、箱根美術館等でアルカリ炉紙法により、イオウ酸化物、窒素酸化物を測定、継続中。

特別研究に関して空気汚染を分担し、京都市二条城、智積院、妙蓮寺等3地点の書院及び屋外計9ヶ所で空気汚染度を測定、続行中。

C H N 元素分析計の応用として、是川遺跡出土有機物の元素分析を行なった。

新築の国立公文書館収蔵庫内外4ヶ所で空気中のイオウ酸化物、窒素酸化物を測定、継続中。

科学研究費(一般研究D)により“公害環境における美術品の実態調査。”と題するアンケート調査を行なった。調査の対象としたのは都道府県教育委員会、国公立総合博物館、考古博物館及び国公立美術博物館で合計551件、郵送により回答を求めた。回答率は60・18%であった。

見 城 敏 子 (物理研究室)

国立公文書館、静岡県立登呂博物館、京都市立美術館、埼玉県立博物館等の展示施設、収蔵施設の温湿度、偏苛度を調査した。近年建造後間もなく開館する為、偏苛度があり好しくない。実際に現場でケース内にニッカペレットを入れて基礎研究を応用して見た。汚染も吸着し、湿度も一定になり、研究成果をあげた。

両陛下ヨーロッパ旅行記念展出品御物の梱包に協力した。受託研究「陽明門彩画側壁に関する調査研究」の一員として漆、唐油の劣化状態を調査した。

「初期油彩画に関する科学的方法を含む美術史的研究(科学研究費一般研究B)」の分担者として油絵の表面劣化を受持ち、黒田清輝、高橋由一、小田野直武、佐竹曙山等の油絵初期の作品を調査し、古い油絵の表面の状態を知る事が出来た。

石 川 陸 郎 (物理研究室)

特別研究の一環として京都二条城、智積院について年間を通して温湿度記録を行っている。

V 研究活動及び事業

受託研究として加曾利貝塚の保存環境について湿度調節を行ないながら貝層断面の保護にあたっている。

日光東照宮陽明門側壁彩色油彩画のX線透視を行ない描かれている構図、描き重ねられている下絵などを明らかにした。

科学研究費（一般研究B）の分担として長崎県立博物館、琴平宮博物館所蔵等の西洋画について画面の劣化や修復状況等調査研究を行なった。日本の代表的作品即ち彫刻、漆芸品についてもその製作技法を解明するため奈良、京都の寺院、博物等の所蔵品の調査を行なった。

新井英夫（生物研究室）

日本における蟻害の現状把握のため、文化庁建造物課主催の蟻害緊急調査会と第14回しろあり対策全国大会に出席した（46・4～5）。

建設中の埼玉県立博物館収蔵庫のコンクリート壁面に黴が発生し、これの調査と防除を依頼されたので、原因を調べて防除対策を指示した（46・7）。

重要文化財増上寺三解脱門の上層解体部材の虫害が著しく、調査と防除対策を依頼されたので、現地調査（46・5）の結果、燻蒸処置（46・7～8）した。保存科学第9号に報告。

特別研究（障壁画）で智積院・二条城などの生物劣化を調査し、空気中の微生物を採集した（46・7）。

第2回国際生物劣化シンポジウム（オランダ）に参加、第1回国際菌学会議（イギリス）に参加、ヨーロッパの保存科学の調査、微生物株保存機関の調査、ポロブドール遺跡調査の目的で40日間の海外研修旅行をした（46・8～9）。

科学研究費（一般研究B）により初期油絵の生物劣化を研究・調査のため、秋田・九州・四国に分散している油絵を調べた（46・10、46・11、47・1）。

伊勢の神宮文庫の虫害が著しく、対策を依頼されたので、被害を調査した（46・12）。

江本義数（生物研究室）研究員（非）

福岡県王塚古墳内に発生した菌類の研究。資料を得て菌類の分離、古墳内の空中菌

を採取して培養を行なった。(46・6)

東京都千代田区国立公文書館書庫内の空中微生物の調査。

書類は未だ搬入されて居らず、空調が行われており、菌種は少かった。(46・11)

宮崎県宮崎市、西都市所在の横穴古墳、および臼杵市の石仏に発生した糸状菌の研究。

資料を得て菌の分離培養を行なった。(47・2)

岩 崎 友 吉 (修理技術研究室長)

加曾利貝塚保存処置

窯跡保存処置

宮崎県立総合博物館保存処置指導

新潟県中条町荒川神社保存処置指導

羽黒山神社板戸絵画保存処置

日光東照宮陽明門絵画調査

新潟県旧県会議事堂天井保存処置予備調査

万福寺本額等剥落止め経年変化調査

如庵部材科学処置指導

土岐市窯址保存指導

イラク・クルナ水没文化財調査

インド・ニューデリー開催アジア太平洋地域文化財保存会議出席

イタリア・ローマセンター総会及び理事会出席

中 里 寿 克 (修理技術研究室)

漆芸品の調査

科学研究費(一般研究A)により中尊寺金色堂什器及経蔵八角須弥壇を調査(47・2・19~22)し、更に漆皮箱(四天王寺)、黒漆油壺(東大寺)、蒔絵犀(当麻寺本堂)、塩山蒔絵硯箱(京博)、等を実証的な調査を行なった(昭47・1・19~22)。

その他蓬萊山蒔絵袈裟箱(東博)、片輪車蒔絵手箱(文化庁)、螺鈿雷文鞍(水主神社)、左義長蒔絵硯箱、樵夫蒔絵硯箱等を調査した。

古代漆芸品の調査

是川遺跡出土の籠胎漆器二点を調査、合せて漆液付着の壺11点を調査した。

建造物の保存処置と調査

受託研究として唐招提寺金堂天井の彩色について調査（47・3・2～5），日光東照宮陽明門の外部羽目板の唐油画彩色について調査し，文献収集を行なった。大磯の国宝如庵移築に関し樋口技官と共同で移築先の犬山において前後3回にわたり部材の科学的保存処置を指導し記録写真をとった。併せて石灯籠一基の保存処置を行なった。

絵画の調査

科学研究費（総合研究）により高台寺霊屋，都久夫須麻神社（昭46・8・19～21），仙台の大崎八幡宮本殿，国分寺，仙台市立博物館，五大堂，瑞巖寺，円通院を調査（46・9・28～31）。

特別研究費により二条城，西本願寺，智積院の障屏画を調査した。

茂 木 曙（修理技術研究室）

山形県羽黒山神社合祭殿内の板戸彩色保存処置（46・9～47・3）。

新潟県荒川神社の船松馬85点の科学的保存処置（46・12～47・3）。

奈良県唐招提寺金堂天井及支輪等の一部に就いて，合成樹脂による剥落どめ処置を行なった。（47・2～47・3）。

以上は受託研究によるものである。

他に，埼玉県ユネスコ村の御成門その他の建築彩色保存のため一部に実施した。（47・3）。

樋 口 清 治（主任研究官）

昭和46年5月より，国宝「如庵」の解体修理に伴い，各部材の殆んどすべてを，合成樹脂により強化，整形をしたが，この樹脂処置を中里技官と共に指導した。この方法は先年度の旧富貴寺遺材の処置と大体同じであるが，今回は特に茶室と云う特殊性から，仕上り後のテクスチャーを損なわないよう最大の努力がなされた。例えば樹脂が硬化してから彫刻するように整形したり，顔料の配合，ガラスマイクロバルーンの一部使用，古色づけなどの改良をおこなった。更に現場の技術者達の熟練により，完

成後は一見して何処を補修したか分からないほどであった。また、如庵の庭にあった石灯籠6基の保存処置をおこなった。そのうちの1基は、前に硫黄を用いて修理されていたために、火袋の崩壊著しく、保存状態は極めて悪かったが、エチルシリケート系強化剤とエポキシ樹脂等を用いて復原修理をおこない、満足すべき結果が得られた。

埼玉県北本市の県指定東光寺板碑（緑泥片岩）の保存処置も行なった。

最近日本画の修理に用いる補絹用の古い絹が入手困難になってきたので、新絹布を古絹のように劣化させることの要求があった。これに対し100メガラド程度の電子線を絹布に照射することが有効であることを見出し、目下実用化を目ざして研究中である。

昭和47年2月より装飾古墳保存対策研究会のメンバーとして、彩色顔料の保存処置の研究を行なった。

D 主要研究業績

①：著書	②：論文	③：解説
④：研究発表	⑤：講演・放送	⑥：その他

昭46・4～昭47・3

登 石 健 三 (保存科学部長)

- | | | |
|---|-----------------|------|
| ②陳列室・収蔵庫内温湿度に関して (共著) | 保存科学 8 | 47・3 |
| ②室内偏苛空気による乾湿球湿度計の狂い (共著) | " | 47・3 |
| ②コンクリート建造物内空気の偏苛性・偏酸性 (共著) | " | 47・3 |
| ②つくりたてコンクリート室内雰囲気油絵に及ぼす影響 (共著) | " 9 | 47・3 |
| ③新施設での展観 | 東京都博物館協議会会報11 | 46・9 |
| ③特別研究「陳列室・収蔵庫の室内温湿度及び汚染空気が文化財に及ぼす影響とその防除」について | 保存科学 8 | 47・3 |
| ④New concrete building for a museum or a storage, with special reference to tropical climate. | アジア太平洋地域文化財保存会議 | 47・2 |
| ⑥Art and archaeology technical abstracts～抄録報告 | AATA Abstracts | 46・ |

江 本 義 理 (化学研究室長)

V 研究活動及び事業

②汚染空気による生成物の分析	保存科学	8	47・3
②ガスクロマトグラフィーによる収蔵庫内外の文化財環境調査（共著）	保存科学	8	47・3
②奈良国立博物館における正倉院展展示環境調査（共著）	保存科学	8	47・3
②成巽閣の色壁	保存科学	9	47・3
②万国博覧会美術館展示環境調査（共著）	保存科学	9	47・3
④顔料・岩絵具	文化財保存科学研究協議会		46・9 9・9

門 倉 武 夫（化学研究室）

②ガスクロマトグラフィーによる収蔵庫内外の文化財環境調査（共著）	保存科学	8	47・3
②奈良国立博物館における正倉院展展示環境調査（共著）	保存科学	8	47・3
②万国博覧会美術館の展示環境調査（共著）	科学科学	9	47・3

見 城 敏 子（物理研究室）

②陳列室・収蔵庫温湿度に関して（共著）	保存科学	8	47・3
②室内偏苛空気による乾湿球湿度計の狂い（共著）	保存科学	8	47・3
②つくりたてコンクリート室内雰囲気油絵に及ぼす影響（共著）	保存科学	9	47・3

石 川 陸 郎（物理研究室）

②陳列室・収蔵庫内温湿度に関して（共著）	保存科学	8	47・3
②コンクリート建造物内空気の偏苛性・偏酸性（共著）	保存科学	8	47・3
⑤建造物調査に用いられる放射線について	文化財建造物修理技術者講習会		47・1 1・18

新 井 英 夫（生物研究室）

②重要文化財増上寺三解脱門の燻蒸（共著）	保存科学	9	47・3
⑤木材の生物劣化	日本工芸会木工芸第2次研修会		47・3

江 本 義 数 (生物研究室) 研究員 (非)

②寺院収蔵庫内の空中菌	保存科学 8	47・3
②奈良国立博物館内の微生物	保存科学 8	47・3
②日本万国博覧会美術館内の空中微生物	保存科学 9	47・3
②神奈川県伊勢原市宝城坊の葉師三尊の防黴	保存科学 9	47・3
④防黴について	文化財保存科学研究協議会	46・9・9
⑥国立公文書館内の微生物調査報告書	国立公文書館	47・3

岩 崎 友 吉 (修理技術研究室長)

②むかしの環境汚染, 公害	MOL	46・10
②公文書の保存科学	文部省資料館報No. 15	46・12
②発掘に対する化学者の協力	考古学と自然科学第4号	47・2
④Restoration of Jo-an tea ceremony pavilion	アジア太平洋地域文化財保存会議	47・2
⑤文化財と表面保護	金属表面技術協会講演	46・6
⑤史料の科学的保存	文部省史料館講習会	46・10

中 里 寿 克 (修理技術研究室)

②平安時代の平文	仏教芸術80号	46・6
②古代蒔絵粉の研究	保存科学 9 号	47・3
④漆及胡粉下地	文化財保存科学研究協議会	46・9・9

樋 口 清 治 (主任研究官)

②黄金塚出土鉄製品の保存処置 (共著)	保存科学 9	46・3
④合成樹脂応用と現状	文化財保存科学研究協議会	46・9・9
⑤文化財修理における合成樹脂について	第16回修理技術者 (美術工芸品) 講習会	46・11
⑤文化財 (建造物関係) の保存と修復における合成樹脂の応用	昭和46年度文化財建造物保存技術者講習会	47・1

⑥石材の表面の化学的処理方法の研究報告

装飾古墳保存対策研究会 47・3

E 科学研究費題目

(IV予算2科学研究費補助金交付決定額の項参照)

F 受託研究

〔I〕 羽黒山合祭殿内板戸絵彩色保存処置

板戸絵は江戸時代のもので、巾1m・高さ3mに及ぶ大きなものである。杉板に直接、草木鶴鶏などが描かれている。剥落どめ処置はPVA2%~4%の溶液で十分に目的を達した。過去に茅ぶきの屋根の破れから雨もりがあり、殆ど板戸に泥状の汚れが付着しており、これを取除き乍ら実施した。

〔II〕 荒川神社船絵馬保存処置

船絵馬は北前船の航海安全を祈って奉納されたもので、天保8年以降のもの86点で、板に直接彩色してあるもの、胡粉下地のあるもの、板に紙貼りをしてから彩色したものなど、多種多様である。剥離、剥落の状態も複雑でPVA溶液、アクリルエマルジョン等を併用し乍ら処置を行なった。又殆ど船絵馬が長期間燻されていたが剥落どめ処置の際にかなり除去出来た。

〔III〕 唐招提寺金堂天井彩色保存処置

天井・支輪共彩色の剥落甚だしく、顔料の残存部分は非常に少ない。しかし顔料の剥落部分も、白土下地が残って文様の輪郭は可成り鮮明なものが多い。この白土による文様を損なわぬように、顔料の残存部分に、PVA3%溶液を面相筆・注射器を用いて含滲させ、白土部分には溶剤性アクリル樹脂8%溶液を微量吹付けて処置した。尚明治時代に描かれたという天井の復元模様も、かなり剥離が進行しており、この部分に対しては水溶性アクリル樹脂を使用した。

〔IV〕 加曽利貝塚の遺跡保存

貝塚断面及び住居跡の表面には合成樹脂による崩壊防止処置が施されているが、その表面に白化現象がおこり、その殆どは無機塩の析出によるものであることが分った。この現象を止めるため、地中より空中への水分の移動を

防止せねばならぬ。46年度はこれについての二三の試験的方法を実施したが、未だ最良の策について結論に到達していない。

〔V〕日光東照宮陽明門兩袖外壁の調査

陽明門東袖壁牡丹羽目の取はずし修理に際して、その下に梅に錦花鳥の唐油画が発見された。この唐油画について美術史的と材質的との両面から調査研究を行なった。又X線透視写真によりこの唐油画の下に牡丹唐草の図柄を有する層が存在することが判明した。同じくX線透視により西側袖外壁牡丹羽目下に大和松岩笹に果籠鶴の羽目がかくれていることも分った。但し西壁についての透視は全面に及んでおらず部分的であるので、47年度で全面透視を行う予定である。

2 事業

(1) 出版

A 美術研究

昭和7年1月創刊、昭和47年3月第280号を発行。当研究所美術部の調査研究の成果を公表するための機関誌。主として所属研究員の執筆にかかる論文・研究資料・図版解説・美術関係文献の校刊等を掲載し、ときに所外研究者の寄稿を受けることもある。A4判各号本文42頁、原色図版1、単色図版8、各年度6冊刊行。

昭和46年度（第275号～第280号）「美術研究」の論文題目は次のとおりである。

美術研究275号 昭和46年5月

丸文のある古九谷の二作品

中川千咲

新羅金銅仏年代考一特に如来、菩薩小像の台座形式を中心として一

松原三郎

美術研究276号 昭和46年7月

鹿王院釈迦三尊図について

戸田楨佑

吉田忠氏藏古写本『こわたの時雨』について 上

田村悦子

美術研究277号 昭和46年9月

興福寺藏紺紙金字成唯識論の莊嚴面

江上綏

V 研究活動及び事業

- | | |
|-----------------------------|---------|
| 吉田忠氏蔵古写本『こわたの時雨』について 下 | 田 村 悦 子 |
| 美術研究 278 号 昭和46年11月 | |
| 平安初期における如来像の展開 上 | 久 野 健 |
| 美術研究 279 号 昭和47年 1 月 | |
| エルミタージュ博物館所蔵 ベゼクリク壁画誓願図について | 上 野 ア キ |
| 祇多佳の画蹟 上 | 川 上 涇 |
| 萩原守衛 (中) 四一その生涯と芸術一 | 中 村 伝三郎 |
| 山下りんの伝記と作品 | 岡 畏三郎 |
| 美術研究 280 号 昭和47年 3 月 | |
| 新知見の南北朝時代在銘像 | 猪 川 和 子 |
| 桃山・江戸前・中期の産衣十三領について 下 | |
| 一近世小裁・中裁衣類調査報告書 (一) 一 | 神 谷 栄 子 |

B 日本美術年鑑

昭和11年10月創刊、毎年1冊 (ただし昭和19年～21年版および昭和22年～26年版は各1冊) 出版し、昭和47年3月までに30冊を刊行した。内容は、毎年1月から12月までのわが国美術界の活動・情勢を記録するもので、美術界年史・展覧会・物故者略歴・雑誌単行図書美術文献目録等を収録し、所内研究員の調査、執筆による。

C 東大寺^{東大寺}観音悔過 (お水取り) 二月堂

東大寺の修二会は十四日間にわたる雄大な行法で、奈良各寺の悔過法要の中でも代表的なものであるが、その全行法をレコード六枚に集約したものである。第一・二枚には、初夜・半夜・晨朝の悔過作法と授戒・数取懺悔・法花懺法・走りの作法を、第三・四枚には、大導師作法・神名帳・過去帳・呪師作法を、第五・六枚には、供養文・如来唄・散花・呪願・称名悔過・宝号・回向文の声明について、その変種のすべてを比較して収めた。また上記三区分それぞれに一冊ずつの解説書を添え、別に総説一冊を加えた。このレコードは本研究所の監修にかかり、構成・解説には、音楽舞踊研究室員が当たった。なおこのレコードに対して昭和46年度芸術祭優秀賞が授けられた。

D 芸能の科学 3—芸能論考 1 昭和47年 3月

- かけ踊の研究 前 嶋 茂 子
- 能における神楽の研究 松 本 雍
- 「巻絹」から「竜田」まで—
- 「天衣紛上野初花」小考 梅 崎 史 子
- 松江侯邸の場を中心に成り立ちと実説—
- 農村歌舞伎舞台仮設の一形式 宮 本 瑞 夫
- 舞台下に臼を敷く民俗について—
- 二月堂処世界日記注解 横 道 萬里雄
- 長禄本処世界日記—

E 保 存 科 学

保存科学 第 8 号 昭和47年 3月

特別研究「陳列室・収蔵庫の室内温湿度及び汚染空気が文

化財に及ぼす影響とその防除」について 登 石 健 三

陳列室、収蔵庫内温湿度に関して 登石健三、見城敏子、石川陸郎

室内偏苛空気による乾湿球湿度計の狂い 見城敏子、登石健三

汚染空気による生成物の分析 江 本 義 理

ガスクロマトグラフィーによる収蔵庫内外の文化財環境調査

江本義理、門倉武夫

奈良国立博物館における正倉院展展示環境調査 門倉武夫、江本義理

コンクリート建造物内空気の偏苛性、偏酸性 登石健三、見城敏子、石川陸郎

寺院の収蔵庫内の空中菌 江 本 義 数

奈良国立博物館内の空中微生物 江 本 義 数

保存科学 第 9 号 昭和47年 3月

成巽閣の色壁 江 本 義 理

万国博覧会美術館の展示環境調査 門倉武夫、江本義理

黄金塚古墳出土鉄器の保存処置について 樋口清治、青木繁夫

V 研究活動及び事業

つくりたてコンクリート室内雰囲気油絵に及ぼす影響	見城敏子, 登石健三
日本万国博覧会美術館内の空中微生物	江 本 義 数
神奈川県伊勢原市宝城坊の薬師三尊の防徽	江 本 義 数
重要文化財増上寺三解脱門の燻蒸	新井英夫, 森八郎, 原田豊秋
古代蒔絵粉の研究	中 里 寿 克

F その他の出版物

美術部

支那古版画図録	(美術研究資料第1輯)	昭和 7
吉備大臣入唐絵詞	(同 第2輯)	同 9
徽宗摹張萱搗練図	(同 第3輯)	同 10
鳳凰堂雲中供養仏	(同 第4輯)	同 11
桃山時代金碧障壁画	(同 第5輯)	同 12
富貴寺壁画	(同 第6輯)	同 13
印度及南部アジア美術資料	(同 第7輯)	同 14
光悦色紙帖	(同 第8輯)	同 14
菱田春草	(同 第9輯)	同 15
能恵法師絵詞	(同 第10輯)	昭和16
宮素然筆明妃出塞図巻	(同 第11輯)	同 16
日本美術資料	第1輯	同 13
同	第2輯	同 14
同	第3輯	同 15
同	第4輯	同 16
同	第5輯	同 17
近代日本美術資料	第1輯	同 23
同	第2輯	同 24
同	第3輯	同 26
墨跡資料集	第1輯	同 24
同	第2輯	同 24

同	第3輯	同	26
源氏物語絵巻		同	24
黒田清輝素描集		同	24
栄山寺八角堂		同	25
栄山寺八角堂の研究		同	26
法隆寺金堂建築及び壁画の文様研究		同	28
黒田清輝作品集		同	29
東洋美術文献目録	明治以降昭和10年まで	同	16
同	統編 昭和11年～同20年	同	23
東洋古美術文献目録	昭和21年～同25年	同	29
美術研究索引	第1号～第100号	同	16
美術研究総目録	第1号～第230号	同	40
高雄曼荼羅		同	41
東洋美術文献目録	明治以降昭和10年まで(再刊)	同	42
日本東洋古美術文献目録	昭和11年～同40年	同	44

ほかに科学研究費補助金(研究成果刊行費)の交付を受け、または本研究所の監修で刊行された図書は次のとおりである。

光学的方法による古美術品の研究

東京国立文化財研究所光学研究班編	吉川弘文館	昭和30
梁楷	美術研究所編 便利堂	同 32
醍醐寺五重塔の壁画	高田 修編 吉川弘文館	同 34
平安時代世俗画の研究	秋山光和著 同	同 39
近代日本美術の研究	隈元謙次郎著 大蔵省印刷局	同 39
黒田清輝	同 日本経済新聞社	同 41

芸能部

標準日本舞踊譜	昭和35
音盤目録 I	同 40
芸能の科学 1-芸能資料集 1-四世鶴屋南北作者年表	同 41

V 研究活動及び事業

芸能の科学 2 - 芸能資料集2 - 鮫の神楽台本集成	同	41
音盤目録 II	同	45

保存科学部

重要文化財円成寺本堂内陣彩色剥落どめ		
(東京国立文化財研究所受託研究報告 保存科学部 第1号)	昭和35	
国宝明王院五重塔内部彩色剥落止本作業及び木材の科学的処置		
(同 第2号)	同	36
国宝明王院五重塔四天柱塗装処置及び天井板彩色保存処置		
(同 第3号)	同	36
国宝西明寺三重塔内部彩色剥落どめ	(同 第4号)	同 36
重要文化財東照宮内部彩色剥落どめ	(同 第5号)	同 36
国宝海住山寺五重塔内陣板絵及び彩色剥落どめ	(同 第6号)	同 37
重要文化財霊山寺三重塔内部彩色剥落どめ等科学処置	(同 第7号)	同 37
重要文化財万福寺木額、柱群、榜牌等剥落どめ	(同 第8号)	同 38
重要文化財舟屋形内部彩色剥落どめ	(同 第9号)	同 38
国宝興福寺北円堂内部彩色保存処置	(同 第10号)	同 39
国宝崇福寺第一峰門彩色剥落どめ	(同 第11号)	同 39
重要文化財本地堂焼損材補修材料の研究	(同 第12号)	同 40
重要文化財崇福寺三門彩色剥落どめ	(同 第13号)	同 40
重要文化財般若寺十三重石塔初重軸石剥落止め硬化処置	(同 第14号)	同 40
重要文化財吉野水分神社本殿建築彩色剥落どめ	(同 第15号)	同 40
国宝薬師寺東塔内部彩色剥落どめ	(同 第16号)	同 41
重要文化財千代神社本殿の向拜手挟の保存修理にかかる保存処置		
(同 第17号)	同	41
木造神像二軀の科学的保存処置	(同 第18号)	同 42

(2) 公開学術講座

美術部

昭和46年10月30日（土）13・30～16・30 於日本経済新聞社小ホール

1 「物語・草子類中の和歌の書式」

田村悦子

物語・草子類の散文の地の文の間に挿む和歌の書き方は散文と別行独立に書くことが普通見る所であるが、土左日記の伝自筆本に散文から一字あけて和歌を書き続け和歌のあとも散文にじかに書き続けていたようなのが古い形で、それは漢文古典に於て和歌を前後とも直ちに散文に続けて書いたことの少しく変ったものであり、更に漢文中の和歌は漢籍の散文中の詩の書き様から自然に移ってきたものである。土左日記的の書き方の次に散文から行を変えて和歌を記るすが和歌のあとは依然直接に散文に続いている書式になり、それから更にいろいろに変化したものであろう。そのような和歌の挿み方の沿革からして、歌物語の類は歌集類の詞書+和歌の形の発展と考える従来の説よりも、古事記の類から由来するものとみる方がよいであろう。又、和歌を割注に書く特異な形にも注目しその理由について解釈を試みた（その類の和歌は、仮名書きであるから仮名が漢文に対して補助的として小書されたり、又は割注のようところに仮名が多く用いられたので和歌も小字割注にしたのであろう）。

2 平安時代料紙装飾の美

江上 綏

平安時代の書跡遺品には、華麗な装飾を施したものが多い。奈良時代にもかかる装飾の例はあり、正倉院その他にも遺品は存するが、様式・技法の両面から見て、最高度の発展が見られるのは、平安後期、藤原時代である。その遺例は、11世紀中頃から多く知られるようになり、1120年代ごろに制作されたと考えられる本願寺本三十六人集あたりにおいて、技法上の完成と様式の洗練の極を見る感がある。その後、1141年ごろの久能寺経を経て、12世紀後半の平家納経に至ると、やや装飾過多の傾向を呈するが、本願寺本三十六人集においては、各種の技法、殆んどあらゆる使用可能な材料を駆使しながら、適度な調和を失っていない。これら各種の技法の中には、染紙の技法、唐紙の技法、継紙の採用、墨流し、切箔や砂子の使用、絵画的の文様ならびに下絵などが含まれる。継紙は、本願寺本三十六人集以外に殆んど遺例を見ない特殊な技法である。

芸能部

昭和46年12月16日 朝日講堂

「神楽の技法」

1 能と狂言の巫子神楽

松 本 雍

まず神楽の分類より始め、これらとは別に能の中で演じられる神楽について、音楽的構成を示し、現在、能の中で神楽の舞われる8曲は、女神と巫子によること、その女神の舞の種類、巫子と祝詞の関係を述べた。また狂言の中で演じられる巫子神楽について述べ、神楽は本来「巫女の舞う神降ろしの舞」で、それより「女神の遊楽の舞」へ移行したものと説明した。なお説明にはスライド・録音テープを使用した。

2 大神楽の系図

前 嶋 茂 子

実演 鏡 味 小 仙

獅子の伝来、我が国における普及から説き始め、獅子に対する信仰心とその娯楽性が伊勢・熱田の御師と結びついて大神楽が発生、やがていろいろな過程を経て現在寄席でみられるような曲芸中心の大神楽としてしかその姿をみることができなくなってしまった次第をといた。なお鏡味小仙社中には獅子舞と曲撓の実演、解説をまじえての分析をしてもらった。

(3) 開所記念行事

昭和46年度（美術・芸能・保存科学3部合同）

昭和46年11月13日（土）13：00～16：00、東京国立博物館大講堂において「法隆寺に関する講演会」を開催した。

1 法隆寺の彫刻

美術部第一研究室 猪 川 和 子

法隆寺の美術を考える上に根本となる法隆寺建立についての再建・非再建論争の経緯について略述し、推古天皇三十一年銘のある釈迦三尊像をはじめ、薬師如来、小金銅像、四天王像等、七世紀の法隆寺の彫刻の造形様式を概観、釈迦三尊の作者として記される止利仏師の現われる素地としての作家の系譜の考察の一として、わが国最古の飛鳥大仏が止利よりも古くその作者が考えられている最近の説を紹介した。また、法隆寺彫刻に及ぼした外来影響として、近年の発掘や発見にかゝる中国、高句麗、百濟、新羅の諸像を含めた近年の研究の動向を紹介、相互の関連についてもふれた。以上に

ついて年表、スライドを併用した。

2 法隆寺の悔過会と舞楽法要

芸能部音楽舞踊研究室 佐藤道子

日本古来の民俗信仰との関連を色濃く残しながら、仏教行事として定着し、現在まで伝えられている悔過会。舞楽を伴う仏事法要。いずれも奈良朝以来の伝統をもつ法要行事であるが、法隆寺には、修正会・修二会に悔過会を勤修し、聖霊会に舞楽法要が勤修されている。それぞれの法要形式について、スライド・テープを使用して説明した。

3 法隆寺における保存科学的処置

保存科学部修理技術研究室長 岩崎支吉

次の諸件について、要約的講演を行なった。

1. 法隆寺に関する科学的調査、保存処置等について、大正より現在に至る一群の文献、記録等。
2. 法隆寺金堂壁画につき火災前後を通じての調査、保存処置。
3. 金堂火災実態の科学的調査。
4. 金堂焼損材、焼損壁画の保存処置。
5. 金堂天蓋剥落どめ。
6. 金剛力士立像殺虫処置。
7. 金堂壁画再現パネル製作。
8. 法隆寺羅漢堂再建における腐朽部材の再使用のための化学的強化処置。
9. 法隆寺において、保存作業中に観察した興味ある現象。

(4) 国際国内関係

美術部

国際関係としては、美術部の出版物、研究資料など各国との交換が盛んに行われ、また、外国の研究者で当研究所の研究員の指導をうけ、資料を利用して研究する者も多かった。海外出張による調査研究については、陰里鉄郎第二研究室員が近世・近代日本洋風美術と西洋美術との関係について調査研究のため、文部省在外研究員として46年10月より47年8月迄の予定で西欧八ヶ国に出張した。また、川上涇資料室長は、

V 研究活動及び事業

台北故宮博物院所蔵、宋・元・明・清絵画調査研究のため11月台湾に出張、江上綏資料室員は、日本古代紋様、並びに料紙装飾文様の遺品調査のため47年3月より5月末迄米国に出張した。坂本満第二研究室員は、昨年より日仏考古学会派遣の研究員としてパリ国立図書館に於て14世紀以降の西欧版画資料の調査に従事していたが47年3月末帰国した。

国内における活動については前記各項に記されている如くであるが、学会関係として特に美術史学会、美学会などと接触を密にし、多くの寄与をなした。

芸能部

国際関係としては、各国大学・図書館などより芸能部の出版物との交換依頼を受けている。

国内における関係学会としては、部員は各専門別に、芸能学会・芸能史研究会・中世文学会・東洋音楽学会・日本演劇学会・日本歌謡学会・日本近世文学会などに参加し、それぞれの学会に参与・理事・委員・幹事などとして寄与している。

保存科学

I 国際関係

46年度は広義を含む保存関係で国際的な会議が多く持たれた。

46年4月、ローマセンター総会及理事会が開催され岩崎化学研究室長が出席、理事に再選された。

46年5～6月、アスパックの専門家会議が東京で開かれ、関野所長のほか当部より岩崎化学研究室長が参加した。

46年8月より9月にかけて生物研究室新井研究員は第2回国際生物劣化シンポジウム（オランダ）、第1回国際菌学会議（イギリス）に参加、合せてヨーロッパの保存科学の視察調査、微生物株保存機関の調査、ボロブドル遺跡の調査を行った。

47年2月、インドのニューデリーにおいてローマセンター及インド政府による南、東南アジア及太平洋地域の文化財保存会議が行なわれ、登石部長、岩崎修理技術研究室長が招きにより参加した。

47年3月にはユネスコアジア文化センターによりアジア地域保存関係者の会議が東京において持たれ、関野所長、岩崎修理技術研究室長が参加した。

保存科学部への外国よりの来訪者はアスパックの出席者、アジア文化センターの会

議出席者等があった。

46年12月より47年1月にかけて岩崎修理技術研究室長はイラクのクルナ水没文化財調査団に参加、現地に出張した。

47年3月より4月にかけ登石部長はユネスコアジア文化センターより費用の支給を得てインドネシア、インド、タイ等熱帯地域の保存状態を視察し且つそれら各地の保存関係者と専門的意見の交換を行った。

II 国内関係

46年9月岩崎修理技術研究室長は文部省史料館主催の講習会に出講、「史料の保存科学」について講義した。

46年11月、京都仁和寺において第16回修理技術者（美術工芸品）講習会が開かれ、樋口主任研究官は講師を委嘱され講義を行った。

47年1月、文化財建造物保存技術者養成講習会が東京において開催され、樋口主任研究官、石川研究員が講師として協力した。

47年3月、日本工芸会主催にて本工芸第2次研修会が東京において催され新井研究員が木材の生物劣化について講義した。

昭和46年9月9日、当所別館会議室で、文化財保存科学研究協議会を開催、文化庁文化財保護部3課の担当官、東京国立博物館、東京芸術大学その他多数の関係専門家の出席を得て「木材を素地とした文化財彩色の保存と修復」に関して板絵、彫刻彩色および建築彩色を対象として活発な研究協議を行なって、極めて大きい成果を得た。

昭和47年2月24日には同じく別館会議室で文化財保存科学懇談会（第2回）を開催、文化庁文化財保護部長、管理課長、記念物・美術工芸・建造物3課の課長並びに担当官の出席を得て、昭和46年度調査研究概要、昭和47年度調査研究予定、第6回ローマセンター総会、文化財保存に関する専門家会議（ニューデリー）などの報告を行ない、文化財の公開施設、文化財保存処置の実施機関、昭和47年度特別研究、昭和47年度受託研究、文化庁よりの研究依頼などにつき懇談し、又秋期開催予定の保存科学に関するシンポジウムについて意見交換を行なった。

Ⅵ 研究施設・設備

1 蔵 書

美術部

東洋古美術 近代日本美術 西洋美術関係を主として、和漢 (25,605) 洋書 (3,482) を合わせて、29,087 冊、ほかに美術関係雑誌 売立目録類及び拓本がある。

芸能部

雅楽・能・歌舞伎・文楽・邦楽・邦舞・民俗芸能・寄席芸その他わが国の伝統芸能の研究に必要な図書 3,326 冊を所蔵する。演芸画報・歌舞伎新報・歌舞伎 (第1次)・テアトロ (第1次)・上方・民俗芸術・日本民俗・芸能復興・郷土研究・旅と伝説等の雑誌、丸本・謡本等の台本も収集している。

保存科学部

古来の伝統的生産及び工芸技術書 技術史、または数少ないそれらの科学的究明を試みたもの、修理報告書 調査報告書、及び化学 物理 生物学部門の保存科学に関連ある和洋書を合わせて 1,496 冊を収集している。

昭和45・46年度の新蔵書数は次のとおりである。

区 分	美 術 部		芸 能 部		保存科学部		計
	和漢書	洋 書	和漢書	洋 書	和漢書	洋 書	
昭和45年度	781冊	37 冊	157冊	0 冊	140 冊	229 冊	1,344 冊
昭和46年度	514	14	150	0	20	24	722

2 資 料

美術部

主として写真による美術研究資料であるが、その収集の目的は、内外の資料をあまねく収集・整理・保管して、その完璧な収集箇所として美術の研究に資することである。この趣旨に基づいて設立当初から写真撮影による資料の作成をはじめ、印刷物を

整理してこれに加える等その収集につとめている。資料の内容は、日本美術・東洋美術・西洋美術および明治・大正美術に大別し、さらにこれを絵画・彫刻・工芸・建築等に分類整理している。その数は特別大型のものから小型のものまで、約13万余。写真資料のほかには印譜・図版カード等がある。

芸能部

レコード・録音テープ・写真（8ミリ・16ミリシネを含む）等による芸能資料を多数そなえている。レコードには毎年各製作会社から発売される伝統芸能関係レコードのほか、昭和35年度文部省機関研究費によって購入した安原コレクションレコード5,450枚が含まれている。安原コレクションは、明治・大正・昭和三代にわたって刊行された各種邦楽レコードを網羅したもので、近代における邦楽の実態と変遷を知る上での貴重な資料となるものである。録音テープ及び写真は、雅楽・能・歌舞伎・文楽・邦楽・邦舞・寺院行事・民俗芸能その他の伝統芸能を対象に記録してきたもので、演奏法の解析を中心とした写真・テープ、あるいは各種文書の記録写真なども含んでいる。種別による所蔵数は次のとおりである。

区 分	レコード	録音テープ		シネフィルム		写 真
		7 型	5 型	8m/m	16mm	
46・3月まで	5,809 枚	1,016本	262本	99本	3本	多 数
46・4～47・3	6 枚	208本	0	2本	0	〃
計	5,815 枚	1,224本	262本	101本	3本	〃

3 機器・設備

美術部

光学的研究設備

光学的鑑識法を東洋古美術品の研究に応用することは当研究所において既に戦前から企画されていたが、昭和27年度にはそれまでの予備的研究成果と海外における研究設備を参考とし、科学研究費（機関研究）の交付を受けて本格的な設備を整えるにいたった。その後も技術的な進歩に即応して新規の装置を加え、美術史学の実証的研究に多大の貢献をしている。現在の主要設備を類別すると次のとおりである。

I X線透過撮影装置

- | | |
|----------------------|------------|
| (1) 固定式白色X線装置（100KV） | 1式 |
| (2) 固定式単色X線装置（80KV） | 1式 |
| (対蛍光板、支持台、防X線用衝立等) | |
| (3) 可搬式白色X線装置 | 1式 |
| (4) 可搬式ソフテックス装置（J型） | 1式 |
| (5) 可搬式ソフテックス装置（新J型） | 1式（46年度購入） |
| (6) 携帯用ソフテックス装置（E型） | 1台 |

II 紫外線照射装置

- | | |
|-----------------------------------|----|
| (1) 固定式照射装置 | 2台 |
| (2) 可搬式照射装置（フィリップス紫外線ランプ及び専用トランス） | 2台 |
| (3) 携帯用紫外線検査器 | 1台 |

III ナトリウムランプ照射装置 2台

IV 赤外線暗視装置及び間接撮影装置

V 顕微鏡装置

- | | |
|---|------------|
| (1) 双眼実体顕微鏡及び写真撮影装置 | 1式 |
| (2) 新型双眼実体顕微鏡及びカラー顕微鏡写真同時撮影装置（可動支持台及び携帯用スタンド） | 1式 |
| (3) 検査顕微鏡用側視鏡ユニット・モノフォト装置 | 1式（46年度購入） |

VI マイクロ写真関係設備

- | | |
|----------------------------|-----|
| (1) マイクロ写真撮影装置 | 1 式 |
| (付自動現像機, プリンター, 引伸機, 乾燥機等) | |
| (2) ポータブル・マイクロ写真撮影装置 | 1 式 |
| (3) マイクロ読読機 (ルーモ社製) | 3 台 |
| (4) リーダープリンター | |

芸能部

各種伝統芸能の記録及び分析研究のための設備・機器を所有する。

I 設備

録音室 (遮音壁を備える)・調整室・視聴室 (舞台を備える)・資料室・図書室

II 機器

(1) (45 年度までに購入のもの)

ビッチレコーダー	1 台
テープレコーダー	10 台
ビデオコーダー	1 台
16mm 撮影機	1 台
16mm 映写機	1 台
8mm 撮影機	2 台
8mm 映写機	1 台
35mm 写真機	5 台
35mm マイクロフィルム解読装置	1 台
16mm シネフィルム分析装置	1 台
ステレオ音声調整卓	1 台
スピーカー	4 台
スタジオ用照明器具	1 式

(2) (46 年度購入のもの)

8mm 撮影機	2 台
8mm 映写機	1 台

保存科学部

主な研究設備

VI 研究施設・設備

装 置 名	説明, 目的, 性能等	数 量
恒温恒湿槽	0°~40°C 20~90%	1
サンシャインウェザーメーター	劣化促進試験機	1
真空凍結乾燥装置		1
紙耐揉強度試験機		1
光電分光光度計	自記	1
発光分光分析装置		1
蛍光X線分析装置	非破壊法による元素分析	1
可搬式蛍光X線分析装置	現場可搬用	1
X線回折装置およびデバイ・		
シェラカメラ, ラウエカメラ	結晶同定	1
X線発生装置	中間硬度	1
真空蒸着装置	表面薄膜形成	1
金属顕微鏡		1
生物顕微鏡		2
表面アラサ顕微鏡		1
万能顕微鏡		1
Co - 60 γ 線線源	透視用3c 及び0.2c	2
ガイガー・ミュラー計数装置	放射線測定	1
自記分光放射計	光の分光測定	1
ガスクロマトグラフ	ガス分析	1
(水素イオン化検出器・熱伝導 検出器 熱分解装置付)		
回折格子自記赤外分光光度計		1
”	赤外顕微鏡 他上記機械附属	1
引張試験機	5 Kg	1
自動記録式示差熱天秤		1
炭素・水素・窒素分析計		1
減圧含浸装置		1

装 置 名	説明, 目的, 性能等	数 量
減圧殺虫装置		1
超低温槽	- 50℃	1
冷却遠心機	- 5℃ C ~ 5℃ C	1
粒度分布測定装置		1
熱膨張計		1
レオメーター	粘性試験用	1
直読式動的粘弾性測定器		1
ライトガイドカラーメーター	色彩測定	1

文化財の特殊性として、材質の劣化現象究明のための試験機類、非破壊の方法による材質調査のための分析機器類、及び微量試料の分析、調査などに用いる顕微鏡類などである。

4 黒 田 記 念 室

この記念室は、本研究所の創立者故帝国美術院長子爵黒田清輝の功績を記念するために設けられたもので、その油絵・素描・画架等を陳列している。

収蔵されているものは、油絵125点・素描170点・スケッチブック等若干である。これらは創立当時主として黒田家から寄贈されたものであるが、その後、樺山愛輔 黒田照子 田中良氏等からの寄贈もふくまれており、随時陳列替を行なっている。毎週木曜日午後1時から4時まで一般に無料公開している。陳列品の主なものは、「知感情」・「花野」・「湖畔」・「赤髪の少女」・「もるる日影」・「温室花壇」等である。

黒田子爵記念室観覧規程

第1条 本研究所の黒田子爵記念室（以下単に「記念室」という。）は、この規程によって一般に公開する。

第2条 観覧は無料とする。

第3条 観覧者は、備付けの帳簿に現住所、氏名を記載し、掛員の指示を受けるものとする。

第4条 陳列品の模写又は写真撮影を希望する者は、予め書面により届出で許可を受けなければならない。

第5条 観覧者は、記念室内において左の事項を行ってはならない。

- 一 陳列品に手を触れること。
- 二 インク・墨汁等を使用すること。
- 三 飲食及び喫煙をなすこと。

第6条 観覧者がこの規程に違反し、又記念室公開の趣旨に反する行為があると認めるときは、退場を命ずることがある。

第7条 観覧の日時は毎週木曜日午後1時から同4時までとし、観覧を停止する日は左の通りとする。

祝 日

開所記念日（10月18）

年末年始（12月25日から翌年1月6日まで）

夏期（7月21日から8月31日まで）

第8条 本研究所において必要があるときは、前条の日時を随時変更することがある。但しこの場合は予め提示する。

5 観 覧 室

本研究所美術部の図書及び研究資料は主として研究者・学者・美術関係専攻の学生等に公開している。年間の観覧者数は、延 1,000 名程度である。

Ⅶ 職 員

1 現 職 員

昭和47年3月1日現在

所 属	官 職 名	氏 名	入所年月日
庶 務 課	所 長	関 野 克	昭 27・4・1
	課 長	鬼 山 光義	45・4・1
	課 長 補 佐	音 川 啓 太 郎	41・6・1
	専 門 員	藤 江 金 治	20・8・31
庶 務 係	係 長	羽 田 吉 一	28・3・16
	文 部 事 務 官	松 本 多 賀 子	39・6・16
	事 務 補 佐 員	河 原 裕 子	45・4・1
	"	斉 藤 靖 子	46・4・1
会 計 係	係 長	大 釜 一 也	37・1・16
	文 部 事 務 官	本 村 伝 一	34・4・1
	"	角 田 友 子	39・7・16
	作 業 員	高 谷 た ま	39・4・1
	事 務 補 佐 員	高 橋 雄 二	43・10・30
	技 能 補 佐 員	早 川 ツル 子	45・4・1
	作 業 補 佐 員	大 塚 正 司	44・1・6
	部 長	中 川 千 咲	9・4・18
美 術 部	主 任 研 究 官	中 村 伝 三 郎	22・10・1
	"	上 野 ア キ	17・11・3
	室 長	久 野 健	20・5・31
	文 部 技 官	柳 沢 孝	21・9・30
	"	田 村 悦 子	22・6・16
	"	猪 川 和 子	22・6・27
	"	宮 次 男	30・9・1
	研 究 員 (非)	秋 山 光 和	42・2・1
第 二 研 究 室	室 長	岡 畏 三 郎	20・5・15
	文 部 技 官	関 千 代	18・12・15
	"	坂 本 満	33・10・1
	"	陰 里 鉄 郎	41・4・1

VII 職 員

資 料 室	室 長 文 部 技 官	川 上 渾	21・2・28
		田 実 栄 子	23・3・31
		永 雄 ミ エ	23・9・3
		江 上 綏	38・5・1
		関 口 正 之	42・2・1
		河 野 元 昭	46・10・1
		橋 本 弘 次	21・6・15
		市 川 和 正	30・7・1
		野 久 保 昌 良	36・10・1
		浦 山 政 雄	27・10・1
芸 能 部 演劇研究室	部 長 室長事務取扱 文 部 技 官 調査研究員(非)	浦 山 政 雄	
		前 嶋 茂 子	39・7・1
		宮 本 瑞 夫	41・5・1
		横 道 萬 里 雄	28・3・16
		佐 藤 道 子	30・5・16
		松 本 雍	44・9・1
		三 隅 治 雄	27・10・1
		仲 井 幸 二 郎	41・5・1
		登 石 健 三	27・10・1
		樋 口 清 治	37・11・1
音 楽 舞 踊 研 究 室	室 長 文 部 技 官 調査研究員(非)	江 本 義 理	27・4・1
		門 倉 武 夫	32・5・1
		登 石 健 三	
		見 城 敏 子	29・9・1
		石 川 陸 郎	32・4・15
		岩 崎 友 吉	
		新 井 英 夫	45・9・1
		江 本 義 数	33・5・1
		岩 崎 友 吉	27・4・1
		中 里 寿 克	39・1・1
郷 土 芸 能 研 究 室	室 長 文 部 技 官 調査研究員(非)	茂 木 曙	29・7・1
保 存 科 学 部	部 長 主 任 研 究 官 室 長 文 部 技 官 室長事務取扱 文 部 技 官 "	岩 崎 友 吉	
		新 井 英 夫	
		江 本 義 数	
		岩 崎 友 吉	
		中 里 寿 克	
		茂 木 曙	
化 学 研 究 室	室 長 文 部 技 官 室長事務取扱 文 部 技 官 "		
物 理 研 究 室	室 長 文 部 技 官 室長事務取扱 文 部 技 官 "		
生 物 研 究 室	室長事務取扱 文 部 技 官 調査研究員(非)		
修 理 技 術 研 究 室	室 長 文 部 技 官 專 門 職 員		

2 旧 職 員

(1) 昭和46年度

所 属	官職名	氏 名	在職期間	備 考
庶務課 美術部	警 務 員	友 田 薫	41・2～47・3・31	退 職
	文部技官	辻 惟 雄	37・6～46・5・1	東北大へ出向
	"	戸 田 祐 佑	37・6～46・6・16	東京大へ出向
	部 長	中 川 千 咲	9・4～47・3・31	退 職

(2) 昭和25年度～昭和45年度（25年8月～45年度末）

所 属	官 職 名	氏 名	在所期間
庶務課（室）	所 長 事 務 代 理	矢 代 幸 雄	27・4～28・11
	所 長	田 中 一 松	27・10～40・3
	雇 用 員（事務）	山 田 秀 昭	25・10～28・4
	庁 務 補 助 員	長 沢 ア イ	27・5～29・5
	雑 仕 事	吉 野 茂 七	21・11～29・12
	"	諸 星 ハ ル	20・5～29・12
	臨 時 時 筆 生	藤 森 園 子	29・6～31・11
	庶 務 係 長	加 藤 輝 之	27・10～34・11
		安 岡 潤	34・11～36・10
	文 部 事 務 官	長 沢 朝 夫	29・5～36・11
	警 務 員	鶴 田 豊 次 郎	29・4～38・3
	庶 務 係 長	鬼 山 光 義	36・10～38・4
	事 務 員	長 沢 道 子	31・12～39・7
	課 長	小 島 忠 二	26・5～40・3
	作 業 員	糟 谷 愛 子	37・2～40・12
	事 務 員	中 村 圭 子	35・11～40・1
	警 務 員	鎌 田 幸 四 郎	29・1～41・2
	課 長 補 佐	守 谷 安 知	38・4～41・6
	文 部 事 務 官	本 間 春 次	40・4～42・3
	課 長	野 島 弥 三 郎	41・4～44・3
美 術 部	事 務 補 佐 員	横 川 千 代 子	43・4～44・3
	課 長	岩 田 守 夫	44・4～45・4
	技 能 補 佐 員	三 次 ヨ シ	45・4～46・3
	研 究 所 文 部 技 官	島 田 修 二 郎	23・7～26・11
	第 一 研 究 室 文 部 技 官	白 畑 よ し	5・6～27・8

Ⅶ 職 員

芸 能 部	部 長	松 本 栄 一	24・8～27・10
	第二研究室文部技官	河 北 倫 明	18・1～27・10
	第一研究室技術員	鈴 木 友 也	28・1～28・2
	資料室文部技官	持 丸 一 夫	22・6～29・3
	資料室技術員	山 田 桂 二	29・2～30・2
	第一研究室文部技官	大 串 純 夫	14・4～30・7
	第二研究室技術員	池 田 涼 子	22・6～33・6
	文 部 技 官 (併任)	新 規 矩 男	22・10～34・3
	部 長	福 山 敏 男	23・5～34・4
	資料室文部技官	小 沢 健 志	26・4～36・3
	第 一 研 究 室 長	熊 谷 宣 夫	19・10～37・3
	部 長	田 沢 坦	34・6～37・4
	第 一 研 究 室 長	伊 東 卓 治	22・5～38・3
	文 部 技 官 (併任)	光 沢 嘉 圃	27・10～40・5
	"	吉 川 逸 治	22・10～40・5
	"	河 北 倫 明	28・4～40・5
	第 二 研 究 室 長	隈 元 謙 次 郎	7・6～41・3
	第 一 研 究 室 長	秋 山 光 和	21・10～42・2
	部 長	高 田 修	27・12～44・3
	部 長 (併任)	加 藤 成 之	27・10～32・6
	庁 務 補 助 員	新 井 範 子	27・10～34・10
	部 長 (併任)	下 総 覚 三	33・1～37・7
	演劇研究室事務員	玉 木 清 子	34・9～39・6
	演劇研究室研究員(非)	戸 部 銀 作	27・10～40・3
	音楽舞踊研究室研究員(非)	岸 辺 成 雄	27・10～42・3
	郷土芸能研究室研究員(非)	池 田 弥 三 郎	27・10～41・3
	演劇研究室研究員(非)	石 田 百 合 子	40・4～41・3
	"	阿 部 順 子	40・8～43・9
	音楽舞踊研究室研究員(非)	山 路 興 造	41・5～44・3
保存科学部	臨 時 筆 生	赤 岡 恒 子	26・4～29・7
	庁 務 補 助 員	橋 本 義 雄	28・10～32・7
	修理技術研究室長	毛 利 登	37・10～38・4
	物理研究室研究員(非)	呉 屋 充 庸	29・4～40・3
	修理技術研究室長	立 田 三 朗	37・10～45・1

注 (1)(2)の所属、官職は、転退職時を示す。

VIII 関 係 法 規

○文部省設置法（昭和24年法律第146号
最終改正 昭和46年5月27日71号）（抄）

第3節 附属機関

（附属機関）

第36条 第43条〔審議会〕に規定するもののほか、文化庁に、次の機関を置く。

国立博物館

国立近代美術館

国立西洋美術館

国立国語研究所

国立文化財研究所

日本芸術院

- 2 前項の機関（日本芸術院を除く。）の長は、文化庁長官の申出により、文部大臣が任命する。

（国立文化財研究所）

第41条 国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行なう機関とする。

- 2 国立文化財研究所の名称及び位置は、次のとおりとする。

名 称	位 置
東京国立文化財研究所	東 京 都
奈良国立文化財研究所	奈 良 市

- 3 国立文化財研究所には、支所を置くことができる。
- 4 国立文化財研究所及びその支所の内部組織は、文部省令で定める。

○文部省設置法施行規則（昭和28年1月13日文部省令第2号
最終改正 昭和46年9月27日第28号）（抄）

第4節 国立文化財研究所

第1款 東京国立文化財研究所

(所長)

第117条 東京国立文化財研究所に、所長を置く。

2 所長は、所務を掌理する。

(内部組織)

第118条 東京国立文化財研究所に、庶務課及び次の3部を置く。

- 一 美術部
- 二 芸能部
- 三 保存科学部

(庶務課の事務)

第119条 庶務課においては、次の事務をつかさどる。

- 一 職員の人事に関する事務を処理すること。
- 二 職員の福利厚生に関する事務を処理すること。
- 三 公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に関すること。
- 四 経費及び収入の予算、決算その他会計に関する事務を処理すること。
- 五 行政財産及び物品の管理に関する事務を処理すること。
- 六 庁内の取締りに関すること。
- 七 前各号に掲げるもののほか、他の所掌に属しない事務を処理すること。

(美術部の3室及び事務)

第120条 美術部に、第一研究室、第二研究室及び資料室を置く。

- 2 第一研究室においては、わが国の上代、中世及び近世の美術並びに東洋美術に関する調査研究を行ない、及びその結果の公表を行なう。
- 3 第二研究室においては、わが国の近代及び現代の美術並びに西洋美術に関する調査研究を行ない、及びその結果の公表を行なうとともに黒田記念室に関する事務をつかさどる。
- 4 資料室においては、美術の研究に関する資料の作成、収集、整理、保管、公表及び閲覧並びに光学的方法による美術の研究を行なう。

(芸能部の3室及び事務)

第121条 芸能部に、演劇研究室、音楽舞踊研究室及び郷土芸能研究室を置く。

- 2 演劇研究室においては、演劇及びその保存に関する調査研究を行ない、並びにその結果の公表を行なう。
- 3 音楽舞踊研究室においては、音楽及び舞踊並びにこれらの保存に関する調査研究を行ない、並びにその結果の公表を行なう。
- 4 郷土芸能研究室においては、郷土芸能及びその保存に関する調査研究を行ない、並びにその結果の公表を行なう。

(保存科学部の4室及び事務)

第122条 保存科学部に、化学研究室、物理研究室、生物研究室及び修理技術研究室を置く。

- 2 化学研究室においては、文化財及びその保存に関する化学的調査研究(分析化学的調査研究を含む。)を行ない、並びにその結果の公表を行なう。
- 3 物理研究室においては、文化財及びその保存に関する物理学的調査研究を行ない、並びにその結果の公表を行なう。
- 4 生物研究室においては、文化財及びその保存に関する生物学的調査研究を行ない、並びにその結果の公表を行なう。
- 5 修理技術研究室においては、文化財の修理に関する科学的、技術的調査研究を行ない、及びその結果の公表を行なう。

○文部省定員細則(昭和44年5月21日文部省訓令第12号) (抄)
改正 昭和46年5月31日第24号

文部省定員規則(昭和44年文部省令第12号)第2項の規定に基づき、文部省定員細則を次のように定める。

文部省定員細則

- 1 文部省の本省の各内部部局、各国立学校、各所轄機関及び各附属機関別の定員並びに文化庁の各内部部局及び各附属機関別の定員は、次のとおりとする。

文化庁

区	分	定員	備考
附属機関	国立文化財研究所	113人	各国立文化財研究所を通じての定員とする。

- 2 国立立大学、国立立高等専門学校、国立立高等学校、国立立青年の家、国立立博

VIII 関 係 法 規

博物館、各国立近代美術館及び各国立文化財研究所の定員は、国立学校及び本省の附属機関にあっては文部大臣、文化庁の附属機関にあっては文化庁長官が、それぞれ、前項に規定する当該国立学校又は附属機関別の定員の範囲内において、別に定める。

○国立博物館等の機関別の定員について（昭和44年5月26日文化庁長官裁定）（抄）
昭和46年4月1日改正

文部省定員細則（昭和44年文部省訓令第12号）第2項の規定に基づき、「各国立博物館等の機関別の定員について」（昭和44年5月26日文化庁長官裁定）の1部を次のように改正する。

「国立博物館等の機関別の定員について」の表を次のように改める。

機 関	定 員
東京国立文化財研究所	48人

附 則

この裁定は、昭和46年4月1日から適用する。

○教育公務員特例法施行令（昭和24年1月12日 政令第6号）（抄）
最終改正昭和46年3月31日第77号
（教育公務員以外の者）

第2条 省略

第3条 省略

第3条の2 文部省設置法（昭和24年法律 第146号）第14条〔国立の学校等〕及び第36条第1項〔附属機関〕に掲げる機関（日本芸術院を除く。）並びに国立学校設置法（昭和24年法律第150号）第9条第1項〔高エネルギー物理学研究所〕に規定する高エネルギー物理学研究所の長及びその職員のうちもっぱら研究又は教育に従事する者並びに国立養護教諭養成所設置法（昭和40年法律第16号）による国立養護教諭養成所の所長、教授、助教授及び助手については、法第4条〔採用及び昇任の方法〕、第7条〔休職の期間〕、第11条〔服務〕、第12条〔勤務成績の評定〕、第19条〔研修〕、第20条〔研修の機会〕及び第21条〔兼職及び他の事業等の従事〕国立大学の学長及び教員に関する部分の規定を準用する。この場合において、これらの規定中「大学管理機関」とあるのは次の各号の区別に従って読み替え、これ

らの機関の長及びその職員をそれぞれ学長及び教員に準ずる者としてこれらの規定を準用するものとする。

一 法第4条第1項〔採用及び昇任の選考〕については、高エネルギー物理学研究所の長及びその職員にあっては「文部省令で定めるところにより任命権者」、高エネルギー物理学研究所以外の機関の長及びその職員にあっては「任命権者」

二 法第4条第2項〔採用及び昇任の選考の基準〕、第7条、第11条及び第12条については、「任命権者」

○東京国立文化財研究所部室長会議運営規則

(昭和45年1月23日所長裁定)

第1条 東京国立文化財研究所部室長会議（以下「部室長会議」という。）の運営については、この規則の定めるところによる。

第2条 部室長会議は、本研究所の重要事項について協議し、各部課相互の連絡をはかることを目的とする。

第3条 部室長会議は、次の各号にかかげる職員をもって組織する。

- 一 所長
- 二 各部長
- 三 各室長
- 四 課長

第4条 部室長会議は所長が招集し、その議長となる。

2 所長に事故あるときは、会議出席者の中から互選により議長を定める。

3 所長は必要と認める職員を会議に出席させることができる。

第5条 部室長会議は原則として毎月1回開催する。ただし緊急を要する場合は、随時開催することができる。

第6条 部室長会議に関する事務は、庶務課がこれにあたる。

第7条 この規則に定めるものの他、会議の運営に関して必要な事項は、別に定める。

附 則

この規則は、昭和45年1月23日から施行する。

○東京国立文化財研究所受託研究取扱規程

(昭和46年3月15日所長裁定)

(趣旨)

第1条 この規程は、東京国立文化財研究所（以下「研究所」という。）における受託研究（外部からの委託を受けて公務として行なう研究で、これに要する経費を委託者が負担するものをいう。）の取扱いに関し必要な事項を定めるものとする。

2 受託研究は、研究所の文化財に関する調査研究上有意義であり、かつ本来の調査研究に支障がなく、当該年度の予算額の範囲内において行なうものとする。

(受託の条件)

第2条 受託研究の受入れ条件は、次の各号に掲げるとおりとする。

(1) 受託研究は、委託者が一方的に中止することはできないこと。

(2) 受託研究の結果、工業所有権等の権利が生じた場合には、当該権利を無償で使用させ、または譲与することはできないこと。

(3) 受託研究に要する経費により取得した設備等は、返還しないこと。

(4) やむを得ない事由により受託研究を中止し、またはその期間を延長する場合においても、研究所は、その責を負わず、また、原則として受託研究に要する経費を委託者に返還しないこと。ただし、特に必要があると認めた場合は、不用となった経費の額の範囲内において、その全部または一部を返還することがあること。

(5) 委託者は、受託研究に要する経費を、当該研究の開始前に納付すること。

2 所長は、前項に定めるもののほか、必要と認める条件を別に定めることができる。

3 委託者が国の機関、政府関係機関または、地方公共団体である場合は、第1項第3号および第5号の条件は、これを付さないことができる。

4 委託者は、必要がある場合は、所長の承認を得て、その委託にかかる研究を協力して行なうことができる。

(決定の方法)

第3条 所長は、当該研究を担当する職員、当該職員の所属する室および部の長の意見を徴したうえ受託研究の受入れを決定する。

(受託の申込等)

第4条 受託研究の申込みをしようとする者は、別紙様式による受託研究申込書を所

長に提出しなければならない。

- 2 所長は、受託研究の受入れを決定したときは、その旨委託者および研究所分任契約担当官に通知するものとする。
- 3 前項の通知に基づき分任契約担当官は、契約を締結した旨を、所長に通知するものとする。

（研究の中止等）

第5条 受託研究を担当する職員は、当該研究を中止し、または、その期間を延長する必要があると認めたときは、ただちに所属の室および部の長を経て所長に報告し、その指示を受けるものとする。

- 2 所長は、受託研究の遂行上やむを得ない理由があると認めたときは、これを中止し、または、その期間を延長することを決定し、その旨委託者および分任契約担当官に通知するものとする。

（研究結果の報告等）

第6条 受託研究を担当する職員は、当該研究が完了したときは、その結果を所属の室および部の長を経て所長に報告するものとする。

- 2 委託者に対する受託研究の結果の報告は、当該研究を担当した職員が前項の報告後行なうものとする。
- 3 受託研究の成果を公表するときは、所長の承認を得て当該研究を担当した職員が行なうものとする。

附 則

この規程は、昭和46年4月1日から施行する。

〔別紙様式〕

受 託 研 究 申 込 書

昭和 年 月 日

東京国立文化財研究所長 殿

住 所

氏 名 (名称・代表者)

印

東京国立文化財研究所受託研究取扱規程第4条第1項の規程により、下記のとおり
受託研究の申し込みをします。

記

1. 研究題目
2. 研究目的および内容
3. 研究に要する経費
4. 研究用資材、器具等の提供
5. その他

昭和47年 8月29日 印刷 非売品
昭和47年 8月31日 発行

発行者 東京国立文化財研究所

代表者 関 野 克

東京都台東区上野公園13-27